

北九州芸術劇場＋市民共同創作劇

平成25年度

Re:北九州の記憶

戯曲集

はじめに

私たちが記録として知っている「街の歴史」には当然のことですが、私たちの身の回りの、ごくごく個人的なことについては記されていません。ですが、確かに当時を生きた人達はその場所に住んで、日々を暮らしていました。その時代に生きた家族のこと、仕事のこと、結婚のこと・・・様々なエピソードの「個人の歴史」が集まるとそれもひとつの「街の歴史」になるのではないのでしょうか。

「Re:北九州の記憶」では、北九州市に暮らす高齢者の方々に、地元の若手作家がインタビューを行い、1つのエピソードから発想を得た新しい物語を作りました。

この作品を通して、過去も未来も主役はこの街に暮らす私達である事に気付く事、そしてこの作品達が、この街の財産となる事を目指しています。

目次

門司港、夕方に歌

自宅船

雨と小文字焼き

カンパン

カクテルの色く小倉 スタンドバーにてく

昭和12年7月31日

初めてパーティー券(1500円、今でいう5000円前後)を買わされた日の話

潮風と芝居

お花が好きなあの子

林帆の海く洞海湾にてく

作 穴迫信一 . . . 1

作 寺田剛史 . . . 21

作 藤本瑞樹 . . . 31

作 寺田剛史 . . . 59

作 鵜飼秋子 . . . 97

作 藤本瑞樹 . . . 125

作 穴迫信一 . . . 149

作 塩津順子 . . . 176

作 塩津順子 . . . 186

作 鵜飼秋子 . . . 201

門司港、夕方に歌

作 穴迫信一

【登場人物】

シズエ 14歳

タカユキ 14歳

イズミ（シズエの母） 41歳

牧師 30歳前後

シズエの家 タカユキが遊びに来ている

タカユキ いいだろー

シズエ それ本当？

タカユキ だから本当だって、信じろよ

シズエ えー、だってー、くれたの？タカユキに？

タカユキ うん、まあ、俺にくれたわけじゃないけど、コウタは実際もらってたし

シズエ 見たの？

タカユキ 見たっていうかいたよ、その場所に

シズエ 一回じゃないんでしょ

タカユキ そうだよ、いつ行つたつて、誰かが出てきて、こうやって手振つてそのあとに下ろしてくれるんだ

シズエ 本当ー？

タカユキ だからもういい加減信じろよ

シズエ だつてさー、ありえないもん

タカユキ なに？なにが信用できないの？俺だから？俺が話してるから？

シズエ うーん、信用できないっていうか…

沈黙

タカユキ わかった、お前、羨ましいんだろ

シズエ え

タカユキ 羨ましくつて、認めたくないんだろ

シズエ あ、あ、あ、うん

タカユキ やっぱり！

シズエ だつてさ、パンでしょ、パン、

タカユキ パンだよ、本当にうまい

シズエ クラスの男子、みんな食べたの？

タカユキ みんなじゃないけど、ほとんどは

シズエ もうーずるいよー

母、現れる

タカユキ あいつらって、実はいいやつなんだよ

イズミ あら、タカユキ君、また異人館行ってたの？

タカユキ あ、おばさん、こんばんわ、おじゃましてます

イズミ 異人館行ってたの？

タカユキ はい、毎日行ってます、あ、行くっていか近くを通るだけなんですけど
イズミ 学校で危ないから近寄っちゃダメよって言われない？

シズエ ねえ、私も異人館行きたいよ

イズミ ダメよ、危ないんだから

タカユキ 全然平気ですよ、今日もコウタ達と行ってきました

イズミ えー、本当

シズエ ねえ、いいでしょ、お母さん、私も行きたい異人館

イズミ ダメです

シズエ なんでよ、私もパンも食べたいだけなのに

イズミ パン

シズエ そうよ、パンよ、パンもらえるのよ、それもちっちゃくて固くてパサパサの
やつじゃないのよ

タカユキ そうなんです、蒸しパンなんです

イズミ 蒸しパン？蒸しパンくれるの？異人館の人

シズエ タカユキが言うには

イズミ タカユキ君、本当？

タカユキ 本当だって

シズエ タカユキがね、異人館の下から手振ったら、中の人気がついて、二階の窓

からパンを糸にくくりつけて下におろしてくれるんだって

タカユキ 手振るだけじゃダメだよ

シズエ え？

タカユキ 下からパンシンジョって叫ばないと

イズミ パンシンジョ？

シズエ 何それ

タカユキ パンくださいって意味、だったっけ、まあとにかくそうやって言えば誰が

言ったってくれるよー、中国人優しいんだもん

なんだか沈黙があって

シズエ ねえ(母に)

イズミ ダメよ、危ないもの

イズミ、部屋から去ろうとする

シズエ だから危なくないんだって

イズミ 何かあつてからじゃ遅いでしょ

シズエ お母さんは行ったことないから知らないだけでしょ、いい人たちの

イズミ いい人なわけないでしょ、殺されたっておかしくないんだから

タカユキ え？

イズミ そうよ、そういうことだって考えられるのよ

シズエ そんなわけないもん

タカユキ うん、うん

イズミ タカユキ君たちも運が良かっただけよ

タカユキ そんなわけないよ、おばさん

イズミ 怖いわよ、中国人は急にくるんだから

タカユキ 急に？

イズミ 急に、わー！って、大勢で

タカユキ 怖っ

シズエ もう、タカユキ

イズミ やめときなさい、やめときなさい

シズエ …でも

タカユキ シズエ

イズミ やめときなさい

イズミ、去ろうとする

シズエ お母さん

イズミ、立ち止まる

シズエ 近くを通るのもダメ？

イズミ 見張りの人がたつてるでしょ、また天ぶら作ってあげるからあれで我慢しなさい

シズエ どうせ、いもでしょ：

タカユキ おばさん、僕も

イズミ はいはい、タカユキ君のもね

シズエ 見張りの人、危なくないもん

イズミ はいはい

シズエ いつも芋ばかり！

イズミ さつまいも！

シズエ だから芋でしょ！

イズミ また何にも食べられなくなるよ！

シズエ

イズミ わがまま言わず食べられるものは食べなさい

シズエ

イズミ 蒸しパンだって、もうちよつとしたら作ってあげるわよ

シズエ さつまいも、の、天ぶら、あたし、いらなから

イズミ はいはい

イズミ、去る

タカユキ やった、おやつだ。シズエいらななら俺にくれよ

シズエ …見張りの人、危なくないもん

タカユキ うん、そうなんだよな、まあ、でも、いいじゃん、作ってくれらるって言うてんだし

シズエ 異人館の見張りの人、私喋ったもん

タカユキ え？見張りの人と

シズエ 喋った

タカユキ 本当に？なんだ、異人館行ったことあるんだ

シズエ 実は前からクラスの男子が噂してるの聞いてて

タカユキ パンシンジヨ？

シズエ そう、パンの噂

タカユキ その見張りの人にパンもらったの？

シズエ ううん、その時は、

タカユキ パンシンジヨって言った？

シズエ 言わないよ、知らないもん

タカユキ あ、そっか

シズエ だから、その時は……もらった

タカユキ え

シズエ 炒り豆もらった

タカユキ …豆？

シズエ うん、炒り豆ね

タカユキ …うん

間

タカユキ …おいしかった？

シズエ おいしくない、全然、だって固くて…

タカユキ、笑う

シズエ もう

タカユキ でもよかったじゃん、なんにももらえないよりは

シズエ そうだけど…

タカユキ やっぱり中国人は優しいな、というか外国人はみんな優しいと思うよ

シズエ なんて

タカユキ だってここ日本だろ？日本人に外国人が優しくするのは当たり前前の事だよ

シズエ …そっか

タカユキ そうだよ、あ、そうだよ

シズエ なに

タカユキ この家の隣に教会あるだろ？

シズエ え？

タカユキ あそこ、今は外国人のシュウヨウジヨ？なんだって

シズエ シュウヨウジヨって？

タカユキ ホリヨがいるんだよ、捕まってるの

シズエ 誰に？

タカユキ 誰にっていうか、日本に？

シズエ そうなの？

タカユキ まあわかんないけど、フランスとかオーストラリアとかのホリヨがいるって聞いたから、行ってみれば、なんか食いもんもらえるかもよ

シズエ えー、でもお母さんは異人館より危険だって

タカユキ 捕まってるんだろ？大丈夫だって

シズエ だけど

タカユキ それに、隣だし

シズエ うーん

タカユキ まあ、でもお母さんにはれないようにな

間

シズエ …うん、うんうん、よし、行くか

タカユキ お、さすがシズエ、明日の学校帰りなら俺もついてくけど

シズエ (タカユキの話をきいておらず) ちよつと遅いけど

タカユキ え

シズエ ご飯までに戻ってくれば大丈夫か

タカユキ おい、なあ

シズエ ちよつと行ってくるわ

タカユキ え、今からいくの？

シズエ うん、今から行く、お腹すいたし！

タカユキ、呆然

シズエ、外に駆け出、収容所の近くへ

牧師、収容所の周りをゆっくり徘徊している、鼻歌を歌っている

シズエ、牧師に気づく

シズエ わあ！

牧師、シズエに気付く

牧師 お、はっはっは、

シズエ …はっはっは、って

牧師 ごめんなさい、びっくりして思わず笑ってしまった、あるんです、こういう時が、私は、はっはっは

シズエ いいえ、こちらこそごめんなさい、私もびっくりしました
牧師 走ってきたの
シズエ はい、全速力
牧師 はい、速かったです、確かに

シズエ、思わず漠然と話したが、コトを思い出す

シズエ …牧師さん
牧師 はい、改めてこんばんわ、えっと、お隣の
シズエ あ、はい、そうです、津田です
牧師 学校は終わりましたか
シズエ はい、今日はもう
牧師 そうですか
シズエ ……

牧師、また歩き始める

シズエ、何と切り出そうか、悩み

シズエ …牧師さん、中国語喋れますか
牧師 え、いえ
シズエ そうですか

牧師 はい、どうしました？

シズエ じゃあ英語

牧師 英語なら少し

シズエ ……そうですか

牧師 ……はい

シズエ じゃあ、牧師さん、例えばね

牧師 はい

シズエ パンが、仮にパンが食べたいとして、それって何と聞いていますか？まあパンじゃなくてもいいです、食べたい物があつて、例えばね、その食べたい物が欲しい時、じゃあ、じゃあ今はパンということで、パンでいいです、うん、パンが欲しい時、何と聞いていますか

牧師 そう言うときは、(ネイティブに) please give me bread.

間

シズエ ………は？

牧師 え

シズエ あ、ごめんなさい、ちょっと、もう一回いいですか
please give me bread.

シズエ、口を開け呆然と牧師を見ている

シズエ

もう一回

牧師

please give me bread.

シズエ

(即座に) 無理、(叫ぶ) パンシンジョー……!!

牧師

あ、ちよつと、ちよつと

シズエ

パンシンジョー! パンシンジョー!

牧師

もう暗くなってきましたよ、静かに、ちよつと

シズエ

パンシンジョー! 届けー! 中国語で届けー!

牧師

静かに!

牧師の声が夕方と夜の間の門司に響いた

シズエ、心臓をドキドキさせながら

シズエ

…静かに、静かに、はい

シズエ、いよいよ泣いている

牧師、落ち着き

牧師

どうしたんです

シズエ

だって…

牧師

…はい?

シズエ …タカユキが…友達が、言ってたんです

牧師 何を

シズエ …異人館の中国人からパンもらったって

牧師 異人館

シズエ …はい…言ってたんです…外国人は日本人に優しいんだって…うう…

牧師、驚き

牧師 はっはっは

牧師、思わず笑ってしまう

シズエ、それをにらみ

牧師、すぐさま反省し、姿勢を整え、また喋り出す

牧師 津田さん

シズエ はい

牧師 収容所、は、異人館、とは少し違うんですよ

シズエ …え、そうなんですか

牧師 はい、収容所に暮らす外国人たちは今の日本人よりもっと大変な生活をしてるんです

シズエ え

牧師 外国人が日本人に優しいかどうかは、私もわかりません、でもね津田さん
シズエ はい

牧師 いつかお互いの国を尊重しあつて、日本人と外国人が優しくあえる日が
来れば、それはきつと素敵なことだと思ふんですよ、そして門司はきつと
そういう町になれると思ふんです

シズエ、あまり意味が分からず黙っている

牧師 …この収容所には4カ国の捕虜が収容されていますそれぞれが祖国を思
い、寂しい思いをしています。私がしてあげられるのはこうやって賛美歌
を歌うこと、だけなのです。

シズエ …歌うことだけ

牧師 ええ

シズエ さつきの鼻歌？

牧師 はい？

シズエ え、あの、鼻歌

牧師 ああ、聞こえてましたか、鼻歌

シズエ …はい

牧師 そう、あれがね、賛美歌というんですよ

シズエ …へえ

牧師 はい

シズエ、何かを思い出し

シズエ

あ、賛美歌

牧師

はい、賛美歌は人々の心を救うため…

シズエ

なんだったっけ…

牧師

ええ、ですから…

シズエ

キリストの歌！

シズエ、目を輝かせている

牧師

ははは、そうですそうです

シズエ

クラスの友達が歌ってたんです

牧師

ああ、そうですか

シズエ

教室で、一人で、みんなに笑われてました

牧師

そうですか、はっはっは

シズエ

キリストの歌ですもんね、キリスト…

牧師

ええ、そうですよ、どうしました

シズエ

なんで賛美歌歌ってるんですか？

牧師

え、あ

シズエ

外国人のためですか

牧師 うーん

シズエ 外国人のためですよ、日本人で賛美歌とか歌うのって牧師さんだけじゃ

ないんですか

牧師 うん、そうとも限らないんですが…

シズエ ここって外国人の住んでいるところですよ

牧師 住んでいるというか、どうやってお話しましょうか

シズエ キリストもパンくれますでしょうか

牧師 パン、キリスト、うーん、それを説明するには

シズエ あ、ちよつとまつて！さつき牧師さんみんなのこころを救うつて…

牧師 はっはっは、どうしたの

シズエ 答えてください！牧師さん！みんなって、どういう意味ですか

牧師 みんなの心とは、つまり、世界中すべての人々の心…ということですね

シズエ …ん…すべて

牧師 ん

シズエ ……私も？

牧師 (笑って)もちろん

シズエ、泣き止んでいる

牧師、また賛美歌を歌いだす。

牧師 きけや愛の言葉を、もろ国人らの罪とがをのぞく主の御言葉を、主の御言葉を。

シズエ

…賛美歌

牧師

そうです

シズエ

歌詞の意味、全然分かんなかった

牧師

そうですね、歌詞の意味は、あなたの抱える不安や悩み、そして罪すらも

神は赦してくださいます。それをあなたが信じることであれば。

シズエ

信じる

牧師

ええ、信じることは難しいですが

シズエ

難しい、です

牧師

どうですか

シズエ

…よくわかりません、

牧師

それでも大丈夫です

シズエ

大丈夫なんですか、よくわからなくても

牧師

何か、悩みが、ありますか

シズエ

…うーん、悩みなのかな…

牧師、言葉にせず、シズエに話すように促す

シズエ

空襲

牧師

…空襲

シズエ

うん

沈黙があつて

シズエ

…空襲の日の景色、覚えてますか、この門司の街が、大きな炎で真っ赤に染まって、なんかすごくきれいだっただんです。

牧師

ええ、そうでした

シズエ

私、その日の景色をもっと見ていたかったです。何にも考えずただ、ずっと、ぼーっと

牧師

…はい

シズエ

それって変なことですか？その空襲でお父さんは死んだのに、私はなんだか、あの日の景色がすごく、だから、綺麗で

牧師、かける言葉が見つからない

シズエ、何かを考えていたが

シズエ

お父さんの作るマドレーヌ、甘くておいしかった

牧師

マドレーヌ

シズエ

父、コックさんだったんです

牧師

そうですか…

シズエ

…お腹すいた

牧師

はは、

シズエ

明日もいますか

牧師 ええ、この時間には毎日

シズエ じゃあ、また来ます

牧師 ええ、じゃあその時は、一緒に賛美歌を

間

シズエ 考えときます！

シズエ去る

牧師、微笑む

賛美歌、聞こえない

自宅船

作 寺田剛史

【登場人物】

母

組長（声）

声

1953年（昭和28年）6月26日。雨

母が立っている。

母、慌てて窓の外を見て、

組長の声が聞こえる。

組長（声）石川さーん！石川さーん！

母、窓を開ける。

雨の音が激しく聞こえる。

母 組長さん！組長さん！

組長（声） 逃げんねー！！

母 解つとる！解つとるけど。

組長（声） 娘つれて逃げんねー！！紫川もあふれてもう海みたいなつとりたい！なんでまだ家ん中おるとね！はよ避難せんね！！今そつちつけるけ乗り！うわあああああ！

母 組長さん！組長さん！……。

暗転

母は急いで鞆に荷物を詰めている
娘に気づく

母 なんね、どしたんね。

母 誰に言いよったかって？いや、組長さんがね、お元気ですかって言いよったけね、元気ですよって言いよったとよ。

母 雨？うん、降りよるね。はよ止んだらいいねえ。

母 ……、なんね、どうしたんね。じーっとしてから。

母（荷物を見て） ああ、これ？これはちよつと片付けしよるとよ。

母 母 母 母 母

よし、片付け終わり。さてと、何して遊ぼうか？あれしようか、動物モノマネしようか。

えー、じゃあねー。ええ？なんねそれ、きつねね、きつねのモノマネね。そんなの指できつねしとるだけやないね。

かーちゃんうまいばい。しちゃうか？

ちよ見とつて、ちよつちよそつちいつて。見よつてよ。

きつねはじめます。

母、きつねのものまねをする。

はいポーズ。凄いやろー。かーちゃんがきつねしたらこんなたい。

交代？いいばい、交代。きつねよ。

そうそう、きょうつけからー。「きつねはじめます」って言うてからよ。

いいねー、はいポーズ。

なんで、止まつとかな、ハイポーズでぴたつち止まらな。もつかいしてん。

はい、きつねはじめ、はいきょうつけ、きつねはじめます。

はい！動いて！動いて動いて！はいポーズ。ストップ！まだよー、まだ

よー。はい！

いいねー。

魚？魚のモノマネ？魚のなんのモノマネすると？

母 母 母 母 母 母 母 母

母 母
あ、待っていいのあるよ。はい場所交代。ちよつちよつと飛び跳ねんって、
埃がたつけ。はいそつち行つて、見よつてよ。
マンボウはじめます。

母、マンボウの物まねをする。

母 母 母
痛！なんで叩くんねって、交代？交代ってまだちよつとしかしとらんやん
ね！こー泳いでいってターンするまでやらせりーよマンボウ。

母 母
マンボウがしたい、ええ？いいばいしてん。じゃ交代。モノマネする人が
そつちよ。そつちが舞台やけ。

母 母 母
違ふよなんでなんで、言つてからせないけんのよ「マンボウはじめます」
はい、マンボウ、はじめます。集中して。はい。

(娘に合わせて) はじめます。

母 母 母
あはははは、あはははは。いいやん、かわいいやん。あはははは。

母 母 母
そうそう、ゆつくりよ、ゆつくり。マンボウはゆつくり泳ぐんよ。そうそ
う、くちくち。こう、こうやつて(母口を尖らす)そ、そ。手は、後ろの
手、そうそう、ゆつくり泳いでえ。はいポーズ。

母 母 母
なんねそれきつねやないね。なんでうごくんねちゃ。止まらな。

母 母 母
よし交代。．．．なんね、外がきになるんね。

母 母 母
あ痛！なんね、ええ？怖い？なんでね、ぜんぜん怖い事無いやんね。あめが
降りよるだけたい。

母 母 母 母 母

お父さん？お父さんはまだ帰ってこんよ、夜にならな。いつつもそうやる？
会いたって、なんねいつつもそんな事言わんやん、なんで今日そんな事
言うんね。帰ってくるよ、暗くなったら。

え？何時って？え？32時？そんな時間ないし。8時くらいやろうね、20時。
みてん、ほら、長い針がまっすぐで短い針が8のところになったら。

32時じゃない。あんた30って言いたいだけやろ。
24、25、6、．．．32時か。

強い風がふく

「繋がらんな」「繋がらんな」と声が遠くで

母

怖いことない、怖い事無いよ。風よただの。

母

よし！じゃ動物やめて、今度はじゃあ何もの真似しようか。

母

え、当ててって？いいよー。じゃあはじめますって言ったらだめよ。

母

やってん。かーちゃんこっちで見よこ。はい、いいよ。

母

風っていいよるやないの、いったら風のモノマネって解るや．．．。

母

風やないの。あんた凄いやん。体全体で風を表現しとるやないの。その手

母

の動きの滑らかさなんね。風やんねそれ。

母

交代？かーちゃんも風やれって？、なんねその顔あたし完璧ですみたいな

母

顔して。自慢ねそれ。自慢覚えたんね。

母

いいよやるよ、風やるよ、かーちゃんの風すごいよ、見よきよ。

母 母
風はじめます。
交代つて！まだちよつと手動かしたただけやろうも。

大きな波の音

母 母 母 母 母 母 母
なーんも怖くないよ、なーんも怖い事無い。
あああはじめるんね、はいいいよ。見よるよ。
え？波？風は？
ああ、波ね、ああ、波ね。
うんうん、今ね、聞こえたけね、波がね。
おお、真剣やんね、なんねその必死な顔。いいよ、はい、「波はじめます」
おおいねー、そうそう、ぐわんぐわんして、そう、そうよ。見てん、外。
ほらもつとぐわんぐわんなりよるやろ。そう、そうよ。

雷がなる。

母
怖くない！！見て見て見て、交代交代交代！「雷はじめます」

母、雷の真似をする。

母
あははははは。似てない。あはははは。雷つて解らん、あはははは。

母 あんたどっから声だして笑いよんね。

声が聞こえる

声 助けてー！！助けてー！！

母、カーテンを閉める。

母 ……。

母、ゆっくりカーテンと窓を開ける、

声 助け……。

母、窓をすぐ閉める。

母、ゆっくり窓を開ける、

声 きゃああー！！

母、窓をすぐ閉める

母 母

あーね、向こうの家もしよるごとあるね。

何を？何をつて、あれよ、助けが欲しい人、物まねよ。助けが欲しい人物まねして遊びよるね。

ね、助けてーって言いよるみたいやもんね。

ええ？こつちもするつて？助けが欲しいひと物まねをね？

いいよ、ほじゃかーちゃんと一緒にやろうか。ね。

せーの、「助けてー」「助けてー」

ん？なん？窓あけるん？

どして？

そうね、よしじゃ開けるよ。

いいね、開けるよ。

母 母 母 母 母 母 母 母

母、窓を開ける

雨、風、波

母

うわああああ！

母、飛ばされる

母

幸子！幸子！

母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母 母

かーちゃん捕まえときよ！

風が入ったら流れが早くなつたな。

あ！酒井さんちが流れて行きよる！

え？どこね！？組長さんどこね

本当や、ヒツかかつとる。

ほんとや、どんどん流されよる。

え？いやいや、競争しよる訳じゃないよ。

海に向かつて流されよる。

そう海。

あんたなんね荷物抱えてから。

なん？海？

行くん？

え？はじめる？

何を？

海？はじめます？

物まね？

よし！かーちゃんも！

「海はじめます！」

雨、風、波、雷

母 母 母

「海はじめます！」
おとうさーん！
おとうさーん！

雨と小文字焼き

作 藤本瑞樹

【登場人物】

相田（あいだ） 66歳・男性 分団長

真中（まなか） 38歳・男性 団員

嵐山（あらしやま） 26歳・男性 今年消防団に入った

遠藤（えんどう） 52歳・女性 リポーター

小倉北区、小文字山のふもと。8月の初旬。午前6時。

この日は13日の小文字焼きを間近に控え、山の斜面の草刈りを行う日である。

小倉北区消防団第3分団の分団長である相田と、団員の真中、嵐山がいる。

相田

着いた、な。

沈黙。

相田、微動だにしない。

真中 ……行かないんですか？
嵐山 みんな……待ってますよ。
相田 ……。

相田、上（山頂の方）を見上げ、

相田 ……あれか。

沈黙。

相田 あれか、山頂は。
真中 そうですよ。見えませんが。あれですよ。
嵐山 行きましょうよ。
相田 とうとう、この日が来た、な。
真中 この日がつていうか集合時間もとつて来てるんですよ。とつて過ぎて
相田 慌てるな。
真中 ……。
相田 まだ慌てる時間やない。

沈黙。

真中

いやもう慌てる時間ですよ！

嵐山

もうみんな山頂に着いてますし、

相田

そうか……。

真中

なんでさつきからそんな重々しい感じ出してるんですか。

相田

真中。

真中

はい。

相田

俺は誰や。

真中

は？

相田

俺は誰や。

真中

相田さん、です。

相田

そうか。

沈黙。

真中

なんですか今の質問。なんですか「そうか」って。

相田

お前はどうか。

嵐山

え？

相田

お前は俺は誰か。

真中

なんなんですかその質問。

相田 お前は俺は誰やと思う？

嵐山 相田さん、です。

相田 そう。そうよ。俺は、この小倉北区消防団第3分団の分団長、相田義宏である。

真中 そうですね。そうですよ。それがどうしたんですか。

相田 俺は、……ほんとにそうか？

嵐山 えっ、なにがですか。

相田 俺は……誰？ここは……どこ？

真中 相田さん……。昨日何時まで飲んでたんですか。

相田 5時。

真中 さつきじゃないですか！

嵐山 ていうか集合時間じゃないですか。

相田 そう。そうよ。

真中 5時集合だったでしょう。

相田 バカお前、5時集合やったら、5時まで飲めるちことやないか。

真中 違いますね。

相田 バカお前今日はあれぞ、草刈りやろうが、草刈りとか別に俺がおらんでもで

きるやろうが、去年もやっとなぞ、去年もやって、今年もやって、来年も

やります。草刈りは、来年もやります。

嵐山 そうですね。

真中 いいよ丁寧な相手しなくて。

嵐山 でも……。

真中

相田さん。相田さんは、誰ですか？

相田

バカお前俺はお前、俺はお前さつきいまお前俺相田さんて、お前いま俺相田さんて呼んだのにお前相田さんは誰ですかち、なん言いようとかお前、おかしいねえ。

真中

相田さんは、分団長でしょう。

相田

そうよ。俺が分団長よ。

真中

分団長がみんなを取りまとめなきゃだめじゃないですか。

嵐山

そうですよ。

真中

みんな相田さんの号令を待ってるんですよ。

相田

あア？どこでか！どこにみんながおるんか！ア？どこにその「みんな」がおるんか？ア？おらんやねえかちや。

真中

もう山頂にいるんですよみんな……。

嵐山

すごい酔ってますね。

相田

なんで草刈るん。

嵐山

えっ。

相田

なんで草刈るん。

真中

小文字焼きの準備のためですよ。

相田

いいやん草とか刈らんで。いいやんもう草ごと燃やせば。あれやん。飛ぶ鳥を落とすあれやん。

嵐山

一石二鳥ですか？

相田

それやん。

真中 山が火事になるでしょう。

相田 そしたら俺らが消せばいいやん。なぜならね、俺らはね、消防団なんよ。火が出たら、火を消します。

嵐山 そういえば消防団なのに火をつけるって不思議ですね。

真中 小文字焼きは特別やけな。

相田 おう真中。

真中 はい。

相田 纏（まとい）持ってきたか。

真中 纏？

相田 纏はあるか？

真中 持ってきてませんよ。

相田 なんか。

嵐山 草刈りだから要らないと思って……。

相田 草刈りなら要らんよ。草刈りならお前、纏とか要らんやろ。使わんやろ。

嵐山 あっなんかいま一瞬ですごいめんどくさくなってきた。

真中 だからまともに相手しなくていいって。

相田 俺はね、俺はいまからすごいこと言うよ。俺はね、小文字焼きとかもうせんでいいやろ。

ふたり絶句。

真中

相田さん！

嵐山

ほんとに……すごいこと言いましたね。

相田

小とか……小とか火つけて、小とかお前、小て。小ぞ。大やろ。普通大やろ。大中小で言うたら普通は大やろ。

嵐山

大は京都でやってるでしょう。送り火。

真中

相田さん。相田さんは、小文字焼きせんていいと思つとるとですか。

相田

だつて大変やん。

真中

本気でそう思つとるとですか。

相田

だつて小よ。うなぎで言うたら……あれやろ、梅やろ、松とか竹やなくて。あの、バスの料金で言うたら、あれやろ、子ども料金やろ。

嵐山

例えがよくわかりませんけど。

相田

あーあれかな。小文字焼きの「小」ち、小倉の「小」なんか。

嵐山

そうかもしれませぬね。

相田

小倉はここぞ！ちことかな。

真中

相田さん。自分は、小文字焼きは消防団の仕事のなかでもとても誇りを持つてやつとります。これはすごいことやと、小文字焼きちゆうのは、これはとても重たいものやと思つとります。

相田

そう。重たい。重たいんよ。荷物がめちやくちやあるもん。

真中

そういうことじゃなくて。

相田

あれやろ、迎え火やけんていうことやろ。ご先祖様が帰ってくるための道標やけていう、そういうあれやろ。

真中

そうです。

相田

お前それやったらお前それご先祖様みんな小倉に帰ってくるやる、北海道のひとのご先祖様とかもお前小倉に来たらお前、こつから北海道で新幹線も東京まで出てそつから乗り換えて、お前それ15日に間に合うか？

嵐山

ちよつと正しいこと言つたような気がするけど、後半どうでもいいですね。

相田

飛行機乗るにしても、お前福岡まで電車で出て、福岡から札幌まで、お前いまから予約とか取りよつたら、取れんやろ予約。取れたにしてもめつちや高いぞ。

嵐山

あの、ご先祖様つて霊だから飛んでいけばいいんじゃないや……？

真中

嵐山。いちいち真に受けていい。

嵐山

すいません。

相田

ちがうんよ、俺が言いたいののはね、俺はね、そらめんどくさいよ。小文字焼き。正直俺は準備は好かんです。山だつて急やし、それも好かんよ確かに。やけどね。迎え火ね、これはほんと大事なことやろう。そらそうやろう。けどね。それぞれの家で、きちーんとご先祖様をお迎えする、そういう準備をしとつたら、別に小文字焼きとか要らんやろうちね、俺は思うんよ。

真中

……。

相田

それをお前、小文字焼きでご先祖様お迎えして、京都のあの字のあのアレであれか？ご先祖様をお送りして。それお前各家庭できちんとやんなさいて、そういうことですよ。俺が言いたいののは。

真中

……。

嵐山

意外ときちんと考えてたんですね。

真中

なんか、どこか違う気がするんですけど、……うまく言えません。

嵐山

真中さん。

相田

やけどね、それは理想であって現実はそうもいかん。みんながみんな日ごろからご先祖様を大事に思うとるわけでもないし、お前あれあの初盆のことか、ご家族もそうやろうけど亡くなった方もそらお前、いろいろあれやろう。不安やろう。小文字焼きはね、山に小ていう火がつくだけよお前そんな言うたら。やけどね、その火を見ながら、普段忘れとることに想いを馳せる。こらあ大事なことですよ。大事な火ですよ。

真中

どっちなんですか。

相田

ん？

真中

分団長は、……相田さんは結局どう思つとるんですか。

相田

バカお前いまのはお前、俺がいま考えたやつやけお前、お前がずーつと言いよつたやねえか、俺の言うこととかいちいち真に受けていいんよお前。

お前はお前が正しいと思うことをね、これはすればいいわけですよ。

真中

相田さん……。

相田

自分が信じることを信じればいいんよ。

嵐山

分団長がいますごくカッコよく見えます。

相田

よし。行け！

2人

はい！

真中、嵐山、行こうとする。
が、すぐに気付いて、

真中 いや相田さんも行くんですよ。

相田 おいお前いまこれお前なんかいい感じやったやないか。いい流れやったやないかこれ。

真中 全然よくないです。

相田 お前いまのはお前、俺が行けち言うて、お前たちがはい！て言うて、はりきって草刈りしてくるていう、そういうあれやったやろう。

嵐山 僕はまんまと引っかかりかけました。

相田 そうやろう。そういうあれやろう。

真中 行きますよ。半から開始なんだから。

相田 半ちなんか。

嵐山 30分てことです。

相田 そらわかるよ。何時半か。

嵐山 6時半です。

相田 いま何分か。

真中 6時（時計を見て）13分です。

相田 はア？バカお前登るのに30分かかるのにいま13分て。もう間に合わんやないかお前。いま13分て。登るのに30分かかるのに。半て。

嵐山 もとはと言えは……。

真中
相田

相田さんが集合時間に来ないからじゃないですか。

お前これ草刈りできんやったら来週小文字山に火いつけられんのか、それしたらお前アレやねえか、来週小文字山に火いつけられんやねえか。

3人、小文字山を登り始める。

相田が先頭に立って歩いている。

暗転。

明かりがつく。

8月13日、小文字焼き当日。午後7時。

8時からの点灯を控えて分団員たちは待機しているが、ここにきて天気が崩れてきた。

この日の様子は中継されるらしく、TV局が来ている。

リポーターの遠藤が相田にインタビューするらしい。

落ち着かないのか、相田は雨が降る中をそわそわと歩き回っている。

真中と嵐山がそれをテントから眺めている。

嵐山

分団長、落ち着きがないですね。

真中

まあ、な、

嵐山

どうなるんですかね。

真中

うーん。

嵐山

中止とかあるとですか？

真中

まあなくはないけど、

嵐山

そうなんですか？

真中

これまでも何回か中止したことあるよ。

嵐山

そうなんです。

真中

やっぱ中止するかもしれんてなったら、

嵐山

落ち着かんのも無理はないですよね……。

真中

相田さん、テント入りませんか。風邪ひきますよ。

相田は聞こえていない様子。

真中

……。

嵐山

気が張ってますね。

真中

うん。

嵐山

台風来よるて言いよつたしなあ……。

真中

今日の夜中で言いよらんかったか？

嵐山

らしいですけど、

真中

まあ、8時がどうなんかが問題やしな。

嵐山

ですね。

真中 風もヒドなってきたな。

嵐山 ……。

真中 ……。

嵐山 あ、そういえば、さつき、見ました？

真中 ?

嵐山 ヒドかったですよね。

真中 なんか？

嵐山 テレビの。

真中 あ、そうなん？

嵐山 見てないですか？

真中 知らん。見てない。

嵐山 分団長。すーごいガチガチで。

真中 リハーサルやる？本番やないんやろ？

嵐山 そうですけど、やけ余計におかしくて。

真中 けど本人テレビ出てしゃべるの嫌いやないんよ。

嵐山 ええ？そうなんですか？

真中 むしろ好きみたい。

嵐山 ええー。

真中 あー、相手がアレやけんかなあ。

嵐山 え？

真中 あれやろ？キコ姐やる？

嵐山

あー。

真中

俺あのひとあんま好かんのよ。

嵐山

僕もですよ。

真中

実際どうなん？

嵐山

え？

真中

キコ姐。

嵐山

あー、なんか、テレビそんまんまっちゅう感じでしたよ。

真中

そうなん。

嵐山

なんか、はい。

真中

あのひとなんかグイグイくるやん。テレビで見た感じやけど。

嵐山

はい。

真中

なんかあの距離感みたいなの、俺ダメなんよ。

嵐山

僕もダメですね。

相田

おい、いま何時か。

真中

(時計を見て) 7時……15分くらいですね。

相田

そうか。

真中

相田さん、こっち来ません？

嵐山

風邪ひきますよ。

相田

あ、おお、

相田、テントに入る。

真中 どう、なるんですかね。

相田 んー、

嵐山 天気、大丈夫ですかね。

相田 天気？

真中 え？

相田 は？

嵐山 台風来よるらしいけどすね、

相田 台風？台風来よるとか？

真中 こっちに来るのは夜中らしいですけど。

嵐山 雨もですけど風もヒドなてきましたもんね。

相田 へ？あ、ほんとや。

真中 え？

嵐山 え？

真中 え？相田さんずっと天気のこと考えとつたんやないんですか？

相田 あら、天気こらすごい悪いやないか。

真中 えー。

嵐山 え？あ、もしかしてあれですか？テレビ出るのに緊張しとるとですか？

相田 バカ言え。緊張とかするか。

真中 そういうことだったんですね。

相田 バカお前、テレビとかあれや、そんなん、あれよ。俺はお前あれよ、小文

字焼きを無事にやるっちゅうことだけを考えたったんよ。

雨に全然気付いてなかったじゃないですか。

……。

真中 テレビ出るの、初めてってわけでもないでしょう。

相田 そういうアレやないんちゃ。そういう、あの、アレやない。

真中 なんですか。

嵐山 あれですか？相手がキコ姐やけ、

相田 バ(カ)、そういうことやない。

真中 やっぱりあれですか？フランクな感じなんですか？

相田 ん？

嵐山 キコ姐。

相田 フランクちなんか。

真中 気さくなっていうか、なんかこう、フレンドリーっていうか、

相田 ああ、そう、やな、

嵐山 なんかそう言うといい感じに聞こえますね。

真中 なんかわうな。言いたいニュアンスとな。

相田 話し、やすい、よ。

真中 なんで片言なんですか。

嵐山 緊張し過ぎですって分団長。

とそこに遠藤がやってくる。

遠藤 すいませーん。ちよつとよかですかあ？

嵐山 出た。キコ姐。

真中 あ、はい、

嵐山 あ、はあ……、

相田 あ、ど、どうぞ。どうぞ。

遠藤 雨ヒドくなってきたですねー。

相田 そう、ですね。

遠藤 あ、相田さんやっぱり緊張しとるとですかあ。

相田 や、そういうことはないです。

遠藤 雨やけできるかそら心配ですよね、小文字焼き。

相田 や、大丈夫です。

遠藤 雨でもやるとですか？

相田 少々の雨じゃ中止にはしません。

遠藤 わあー相田さん頼もしいー。

真中 あ、じゃあ私たちはあちらで……

遠藤 えー、なんかあるとー？

嵐山 あ、や、

真中 本番前に、ねえ、打ち合わせとか、そういうのされるかなーと思って、

遠藤 んーそういうのはもう全部終わつとーけんね、せんよ。あれやったらここ
おらん？ちよつとおつてお話聞かせてよ。

真中 ……。

嵐山 (小声で) どうします？

真中 (黙つて座る)

嵐山 ……。(真中に続いて座る)

遠藤 ねえちよつといい？いまいくつー？あなた(嵐山)とかまだ若いっちゃろ？

嵐山 あ、自分は、26です。

遠藤 えー26！私のちよつど半分やんね。

相田 あ、キコ、さんは、そうでいらつしやるとですか。

遠藤 そうよー私52。見えんやろー？ねー？

嵐山 あ、はは……。

真中 てつきり51かと思いました。

遠藤 もーそれ1歳しか違わんやんなんそれーおかしー。もー、それ若く見える

て感じやないやーん。

真中 (小声で嵐山に) すげえ、なん言つても太刀打ちできん。

嵐山 なるべく黙つときましよう。

相田 あ、まだ、30代くらいかと、思つとりました。

真中・嵐山 !

遠藤 えーそれ本気で言いよらんやろ？

相田 いえ、ほんとに。

真中・嵐山
！

遠藤 あははー相沢さんおかしー。

相田 そ、そうですか。

嵐山 名前間違ってますよね。

真中 訂正しないんだ。

遠藤 えー？ふたりは消防団入って長いと？

真中 自分は、そうですね、10年くらいです。

遠藤 自分（嵐山）は？

嵐山 自分は今年入りました。

遠藤 えーじゃあ新人さんやん！なんか新人に見えーん！たくましいね自分！

（と言いながら嵐山の身体をべたべた触る）

嵐山 そう……ですか？

相田 ……。（遠藤が嵐山を触るのをじっと見ている）

遠藤 すごーい！じゃああれ？小文字焼きも初めて？

嵐山 父が消防団に入っていたので、子どもころ連れてきてもらったことは何
度かありますけど、そうですね、消防団で関わるのは初めてです。

遠藤 へえー。かっこいいね。

嵐山 ……。

遠藤 ねえ小文字焼きてみんなにとってどう？どんな感じと？やっぱりこう伝
統？ていうか、なんかそういう感じのアレがあると？

相田 自分はどうですか！

3人
相田

！

自分は26で消防団に入って、ちょうどこいつ（嵐山）と同じ歳ですけど、そのころから消防団入って今年で40年なるんですけど、この小文字焼きはずっと関わってきとつてですね！そいでここの分団長になったのがちょうどもう11年なるですかね、11年前ですよ。それからはこの小文字焼きは私がリーダーちゆうことですね、小文字焼きは大体3か月くらい前から、竹切ったり草刈ったり、そういう準備するんですけど、それはもうね、誇りですよ、小倉の誇り。北九州の誇り。小文字焼きはね、迎え火ですよ。ご先祖様をお迎えするとです。

……もしかして、

……ええ、

これはもうね、絶やすことのできん火ですよ。小文字焼きはね、小倉の、絶やすことのできん大切な火です。やけ、私は、もうこれは相当な誇りを持ってやつとるです。

そうなんですわーすごーい。自分たちはどうと？

や、まあ、

ええ、

分団長が、こういう方なんで、ええ、もう、自分はついていだけですよ。

……自分もそうです。

いやまあ私ひとりじゃなんもできんですよ。みんなに支えられとる。みんなに支えられとるけすね、自分もこうしてやってこれとるとです。

遠藤
真中
嵐山
真中
嵐山
相田

遠藤

(真中と嵐山に向かつて) えーでも準備とか相当大変やる?ここ登るだけでも相当あるもんね。

相田

いや、これくらいはどうということもなかつた。

遠藤

1年目のきみとか、ね?大変やる?

嵐山

あ、いや、まあ、

真中

分団長がこういう方なんで、自分たちも負けてられんですからね。(嵐山に)な?

嵐山

は、はい。

遠藤

えー自分たちも本番ちよつと出らん?

相田

!

真中

え?

嵐山

ええ?

遠藤

せつかくやけんちよつと出たらいやん。ご家族とかも見たりするつちやる?

真中

あ、いや……(相田の様子を伺う)

嵐山

やー……

真中

ちよつと、テレビとか苦手なんで、ねえ?自分たちは、

嵐山

やめときます。

遠藤

そお?出たかつたらいつでも言うてね。私がディレクターに言うちやるけ。

嵐山

どうも……。

真中

おかまいなく……。

と、雷の音が。

光と音からすると、かなり近くに落ちたらしい。

全員

！

真中

雷が……

嵐山

落ちましたね……。

遠藤

いやーこれかなり近いっちゃんないか？もう私雷好かーん怖ーい。(嵐山にくつつく)

嵐山

あ、うわ、

相田

嵐山！なんしょつとか！

嵐山

えっ、

遠藤

ねえ相川さんこれほんとに小文字焼きするんですか？

相田

や、まだ、わからんです。

遠藤

明日に延期とかできんと？

真中

小文字焼きは13日で決まってるんで、明日に延期とかはないです。

嵐山

今日やらんなら中止、です。

真中

まあまだ30分ちょっとあるけ、様子見て、

全員

！

雷が鳴る。

遠藤 中止？ねえもうこれ今日は無理やろ？ね？相原さん止めよう？

相田 ……。

真中 そんな簡単に中止できるもんでもないので、

嵐山 小文字焼きは自分たちだけのことやないけすね、

遠藤 なん？スポンサーさんとか？

真中 いや、お金がどうかじゃなくて、

嵐山 お盆の大切な行事ですから、

真中 やけ、できるだけやれるように、やる方向ですね、

遠藤 ていうてもこんな天気よ？

雨も風もかなりひどい。

遠藤 雨降って火とかつくと？

相田 火は、いったん燃えればちよつとした雨くらいやったら消えんようになつとります。

遠藤 でもさすがにこれは無理やろ。

嵐山 ……。

真中 確かに、雨もですけど風がひどくなってきましたね。

遠藤 ね？もうやめましようよ分団長さん。

嵐山 とうとう名前ですらなくなつた。

相田 ……キコさん。

遠藤

はい？

相田

あんたんとこ、カメラのひとおるやろ。

遠藤

カメラ？ああ、おりますけど、向こうに。

相田

カメラはその、やっぱ、高いとですか。

遠藤

3〜400万はすると思いますよ。

相田

そうですか。

遠藤

カメラがどうしたんですか。

相田

うん、いや、

雷が落ちる。

小文字山のどこかに落ちたらしく、足下がドン、と揺れる。

全員

！

メキメキメキ、という音が遠くで聞こえる。

相田

こらここの山に落ちたな。下の方。

遠藤

えーもーやだーもー、ね？やめよう？ね？

嵐山

これ、小文字焼き中止ってなったらどうなるんですか？

遠藤

どうなるてなんが？

嵐山

その、中継、

遠藤 (しばし考えて) あ、うわー、いやー、それも困るー。
え。

嵐山 ねえ、小文字焼き自体は中止やけど、火はちよつとつけてもらって、たい
まつ1本か2本でいいっちゃけど、それを中継するとか、

嵐山 いや、それは、

真中 ちよつとここまになつたらそれも危険かもしれんですね。

遠藤 いやいやいや、時間とつてあるんやけん、放送の、

真中 そうかもしれませんけど、

嵐山 ……これ、ほんとにできるんですかね。

遠藤 ちよつとなんとかしてよーもう、

相田 遠藤さん。

遠藤 はい？

相田 カメラ、大事なもんかしらん、高いかしらん、けどね、カメラどつか遠く
に置いて、あんたたち先に山降り。

遠藤 はあ？

相田 中継は中止や。

遠藤 はあ？なにそれ？

相田 中継は、中止や。でけん。

遠藤 いやいやいやいや、それはこつちが決めることです。そつちやない。デイ
レクターも呼んで話せんと。

相田 つまらん。認められん。

遠藤

はあ？

相田

カメラに雷落ちるぞ。

遠藤

無理よ。

相田

命に関わるとぞ！

遠藤

……。

相田

……危険やけん、もう撮影は認められん。二度も、言わせんでください。

遠藤

……。

相田

嵐山、

嵐山

はい。

相田

纏持ってこい。

嵐山

え？

相田

纏よ。持ってこい。

嵐山

あ、はい！

嵐山、去る。

遠藤

なに、纏って。

相田

あんたは早よみんなんところ行き。こんままやったら下手したら山あ降りる

遠藤

のも降りれんことなる。

真中

……。

真中

相田さん、纏って

相田
真中

振るぞ。

……。

嵐山が纏と指揮棒を持って戻ってくる。

嵐山、相田に指揮棒を渡す。

相田はどしゃ降りの雨の中に飛び出していく。

相田

真中！

真中

はい！

相田

前へ進め！

真中は纏を持って雨の中を進んでいく。

相田

はじめ！

相田の号令に合わせて、真中は纏を振る。

相田

やめるな！振れ！振り続けろ！

真中

はい！

相田

振れ！やめるな！止むまでやめるな！

真中

はい！

真中、どしや降りの中か纏を振り続ける。

カンパン

作 寺田剛史

【登場人物】

母

姉

妹

組長

昭和23年、小倉市。

部屋の真ん中に箱がある。妹、箱の上の母のお椀を覗く

妹

(姉に小声で) 汁だけやん。

姉、母のお椀を覗く。

母

食べるよ。

姉妹
母
姉妹

・・・。

いただきます。

いただきます。

三人無言で食べ始める。

しばらくして箱の上にハエが飛ぶ。

妹

うわ！ハエや！わわわ、くんな！ハエ！あっちいけ！うわ！茶碗に止まるな！

姉、ハエを手で払いのける。

母

そんな騒ぐ事か！噛み付かんハエは、はよ食べ！話はそれからや。

姉

はい・・・。

妹

ねーちゃんあたしハエすかん！ねーちゃん殺して。

姉

いいけ食べり。

妹

だつて・・・。

姉

(小声で) 止まってる所叩かんと飛んできるとこは難しい。

妹

生まれ！ハエ！生まれ！

母

お前達は自分がした事わかつたらんね。

姉

ごめんなさい、(妹に) はよ食べりつて。

妹の周りにハエが飛ぶ。

妹 姉 妹 姉 妹

いやー！くんなハエ！（立ち上がる）

動いたら余計飛び回るけ、じつとしとき！

うん。どこ行つた？（キョロキョロハエを探す）あ！おつた！

動くな！じとし！止まったら叩くけ座つとき！

うん。（妹座る）

またハエが箱の上を飛ぶ。

姉妹はハエを目で追う。

姉、紙切れを丸めて棒状にして待つ。

姉妹、ハエを目で追いながらゆっくりと立ち上がる。

それどうするとか？

止まったらこれで叩き殺すとたい。おつた！

うん。（飛んでるハエを目で追っている）

動くなよ。（目で追っている）

うん（目で追っている）……

お前達は自分らがした事解つとるとかかって。

止まった！止まった！

妹 母 妹 姉 妹 姉 妹

ハエは母の頭に止まった。

止まったよ、ねーちゃん。

わかつとる。

どうする？

わかつとる。

殺さんのか？

殺す、でも殺したら、殺される。

どうするとか？

姉妹、しばし動かず。

母が、自分の頭にハエが止まっている事に気づく。

母は目にも止まらぬ早さで自分の頭の上のハエを手で掴んだ。

ああああ！取った！取った！かーちゃん取った！

取ったか！？かーちゃん取ったんか？

姉辺りをキョロキョロ見渡す。

母

取った。

姉妹

妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹

母は、取ったハエを口に運んだ。

わああ！食った！食った！かーちゃんがハエ食った！

うそやん！食った！うそやん！うそやん！

食ったんか！？食ったんか！？

食ったん？ハエ食ったん？

食ったわ。

かーちゃん。

かーちゃん。

はよ食べろ、食べたら話聞くからな。

はい……。

はい……（小声で姉に）怒られるん？

……食べよう。

うん、（急いで食べながら小声で姉に）ハエ手づかみで取って食うとか神やな。神の手やな。

母、立ち上がり、台所の戸を開けてハエを逃がした。
戻って来て。

母

食ったか。

姉妹雑炊をかきこむ。

姉 食べました。
妹 食べました。

母、座る

母 ほじゃ聞こうか・・・二人でやったんか？

姉妹 ……。

母 二人でこれをやったんかて！

妹 ごめんなさい！

母 ちよつと持ってみ。

姉 え？

母 これちよつと二人で持ってみ。

妹 これを？（箱を見て）

母 持ってみてこれを、二人で！これを！ほら早く！

姉妹、言われるがまま段ボールに手をかける。

姉 いい？

姉 母 姉 母 妹 姉 母 姉 妹

はあゝ。
持てたな。
うん。
うん。
今二人ですつと持てたな。
すつとつて感じじゃ・・・。
一個か？
え？

妹 母 姉 母

どういう事か？
え？
これはどういう事かて。
お、重い。

姉妹、段ボールを下ろす。

姉 妹 姉 妹

うん。
行くよ、せーの（妹もせーの）
よいつしょ！

姉妹、段ボールをなんとか二人で抱える。

姉 母 妹 姉 母 妹 姉 母 姉 母 妹 姉 母 姉 母 妹 母 姉 母

一個かつて。

え？

もう隠してないかつて。

隠してない。

本当やな。

これ一個だけや。

も一個重ねて持つて来て、その一個どっかに隠してないかつて。

うちらこれ一個で精一杯やったけ。

大工のおっちゃん達は3つつも重ねとつたけど。

大工？

大工のおっちゃんは3つつ重ねて持つとつた。

大工おつたんか？

うんおつた、立ち退きの家壊す時おつたおっちゃん。3つつ重ねとつたし、

門のところの荷車にどンドン積んでいきよつた。なあ？（妹に）

うん、山盛りやった。あたし達は一個だけなんに。いっぱい持つて行きよつた。

他は誰がおつたんか？

あとは、隣のおばちゃんおつたな（妹に）

おばちゃんは2つつ重ねとつて布切れみたいななん首にいっぱい巻き付けて行

きよつた。

酒井のババアが2つつか。

あとはね、まだいっぱいおつたよ、

姉 母 姉 母 妹 母 妹 姉 母 姉 母 姉 母 姉 母 姉 母 妹 母

あのおばちゃん2つ持てたんならあんたら一人一個持てたんやないか？

一人一個とか絶対無理や、二人でもそうとう重いのに。

ほんとか？も一個隠しとんやないやろね。かーちゃんに内緒で二人じめする
きやないやろね？

そんなことせん。一個だけやもん。

どーも怪しいね。

なんでよ、そんな隠すんなら2つとも隠すよ。

二つとも隠す？あんたちよつとこれ（箱）持ってみ。

これを？

これをよ。

一人で？

一人でたい。

ねえ、どうしてこれを（箱）持たせるの？

どうしてこれを持たせようとするの？

持ってみて！ほら！ほら！（箱を姉にぐいぐい寄せる）

怖いよかーちゃん。

ほらほらほらほら！

ごめんなさい！ごめんなさい！もう返してくるけ、今から行ってくるけご
めんなさい。

いいから持ってみて！

ごめんなさい！、かーちゃんなんか怖い。

妹 姉 母 姉 母

持てるやろ、持ってみ！隠しとるやろ！
隠してないよ。

いいから持て、一人でこれを持ってみって！

・・・はい。

ねーちゃん・・・。

姉、一人で段ボールを持つとうとして

妹 姉

んがあああああ！あー無理や。

持てるわけないよ、二人で持っても、それでも途中落としそうになったり
したんやもん、無理よ一人とか。

持て。

え？

持てって！

怖い。

持て！持て！一人で抱えて見せてみろ！

はい！、待つ、あたし持つ！

え、何で？

姉、目をつぶって集中する。箱に手をかけて、

姉 妹

ねーちゃん！ねーちゃんなんするん！ものすごい顔になつとるよ！
持つて帰るー！ーん！がああああ！ぱー！ー！ー！

姉段ボールを抱える。

妹

上がった！上がったよねーちゃん！あんなに重たかつたんに上がったよ
ねーちゃん！

持つてやるやないの！やっぱも一個隠しとるやる！だせ！

隠しとらんで！あん時は二人で持つたんさつきみたいに。

隠しとらん！！

隠しとらん！！

かーちゃんに内緒で隠したりせん！だつてこれは宿題やもん！

(妹に) 持つて。

え。

そつちもつて。

え。

あたしら人のもん取つて来たんよ、それつてやっぱ泥棒やん。

返すん？

理由は何でも取つたらいけん、やっぱ取つたらいけんやった。だけ返す。

うん。(箱を持つ)

かーちゃんあたしらこれ返してくるけ、だけ許して。(妹に) 行くよ。

姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 母

姉 母 姉 母 姉 母 姉 母

待たんね。

すぐ返してくるけ。

待たんねって、ちよつとそれ置いとかんね。どこ持って行くとなね。

陸軍倉庫に貸してくる。

待たんね待たんね、ちよつとまだ待たんねって。

返してくるけ、だけごめんなさい。

待ちなさいって。

返してくるけ。

姉妹行こうとして

宿題ってなんね。

なん？

その、宿題ってなんねって。

ああ。

だけんあたしら宿題しとったん。

なんね、そらどういうことね、

だけん・・・。

宿題しとったとか関係ないって、取ったらけんもんは取ったらいけん、ほら行くよ。

姉 妹 母 妹 姉 母 姉 母

母

待て待て、ちよつと待ちなさいって、返しに行くのは後でもいい。なんね宿題って、ちよつと座りなさい。

姉妹、座る。

母

こっちこんね。

姉妹動かない。

母 妹 母

こっちに來なさいって。(妹に) なんね宿題ってなんのことね。
学校で宿題でたん。
うんそれで。

母、箱に近づきそーと自分に寄せる。
姉、そつと箱に手を乗せる。

妹 母 妹 母 妹

先生ががっこでみせてくれたん。
なんをね。
かや。
かや?
宿題で、食べられる草を探しなさいって言って。

妹 妹 母 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹

妹 姉 妹 母

それで。

先生がね、カヤを枯らして粉にしてメリケン粉に混ぜて乾パン作るつちゆつて。でもあんな背の高い草はえとるとこないやんつてねーちゃんに

ゆうたら。

いやある。

あるん？どこ？

姉は陸軍倉庫のある方を指差した。

あそこは入ったらいけんつて言われとるよ。

解つとるけど、あそこやつたらカヤがあるはずや、絶対。

入つて捕まったらどうするん？

戦争終わったんやからスパイと間違われる事ないし、大丈夫。

捕まったらもうかーちゃんに会えんごとなるやんか。

んな事ない、大丈夫。捕まらんやつたらいいんやから。

うん。

一旦帰つて日が暮れる前を狙つて行こう。

つてなこで、宿題探しに行つたんよ。

それを先に言わんね、なんね。

うん。

探しに行つてと言う事やな。

姉妹姉妹 姉妹姉妹姉妹姉妹姉妹姉妹姉妹姉妹姉妹

うん。

学校の事で行ったんやな。

うん、そしたら誰もおらんと思ってたのに声が聞こえて来てね、
ほう。

日本語やったから日本人やと思ったん。

ほうそれで。

門が開いとって、そっからみんなが凄い勢いで走って来てからね、
大工もね。

そう、それでどんどん倉庫から荷物運び出しよってから。

あたしは危険だと思ったんだよ。だから逃げようって行っただよ。
ん？

そしたら優子が泣き出してから。

うそだ。

泣きそうな顔しとってから下向いとって。

うそだ。

それで下見たら箱があって、優子が欲しそうな顔しとったけ欲しいん？つ
て聞いたら欲しいって言うけ仕方なく二人で抱えて・・・。

まってまって、でたらめやん、あたし欲しいとか言っていない。

あれ、言っていない？おかしいなあ。

ねーちゃんやん、

何が。

妹 母 妹 母

母 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹 姉 妹

ねーちゃんがじーっと箱見て、あたしがどうしたん？って聞いたら、「食べたい」って急に言いだして、んがー！って箱抱えだしたけ、妹のあたしとしては手伝わん訳けにはいかんやろ？

なんいいよんね、違うやろ。

違うやん！ねーちゃんが始めに取ろうとしたんやん。

あんたやろ。

ねーちゃんやろ！

あんたって！

ねーちゃんって！

あんたって！

ねーちゃんって！

あんたって！

ねーちゃんって！

喧嘩すんな！

姉妹黙る。

偶然物取りに行くわしてってことやな。

うん。

宿題取りにいったんやな。

そう。

母

姉

母

姉妹

母

姉

妹

母

妹

母

姉

母

姉

母

妹

母

カヤが無かったから、カヤから乾パン作ったら大変やから、もうそこにある出来上がった乾パンそのまま持って行ったら、宿題してきたことになるって機転が利いたんやな。

ん？う、うん。ん？

利いたんやなあ偉いなあ。

あ、はい。

それはな、泥棒やないわ。

そうなん？

そうなん？

そうよ、それ泥棒やない。だってたい、取ろうと思っ行ってたんやったらそら泥棒たい。でも取ろうと思っ行ってないやろ、それになんて？え？何しに陸軍倉庫に行ったんで、もういっぺん言っってみ。

カヤを探しに行ったん。

そうたい。(姉に) 何でカヤを探したん？

それは宿題せないけんかったから、

ん？なんて？

だけ宿題せな・・・。

(妹に) ん？

だけ、学校の宿題せないけんかったから、宿題たい。そうたい。学校の宿題たい。んで気づいたらそこがたまたま、たまたま陸軍倉庫やったんたい。そうやろお。

姉妹

・
・
・

母

・・・そらしょうがないわ。うん、しょうがない。

姉

でも返してくる。

母

返してくる？いやいや、危ない危ない、そんな事はさせれん。

妹

じゃあどうしたらいいん？

母

これどうしたらいいん？

姉

どうしたらいいと思うんね。

姉妹

わからん。

母

わからん？

姉妹

ごめんなさい。わからん。

母

・・・食べるしかなかるーもん。

姉妹

え？

母

食べてしまっしかなかるーもん。

姉

そうなんかね。

母

そうなんよ。もうそうなんよこれは。

姉妹、笑顔になる

母

食べちやるけね。

妹

え？

母

いつまでも置いとけんやろ。かーちゃんが食べとっちやるけ安心し。

姉 かーちゃんだけ？

母 は？

妹 食べるんかーちゃんだけなん？

姉妹 なんね、みんなで食べるんよ、かーちゃんだけやと食べきれんよ。そうやる？
う、うん。

母、乾パンを3つずつ姉と妹に渡し。

母 ほれ。

母、箱を持って行こうとする。

姉 待って。

間

妹 待ってかーちゃん。

間

母 なんね。

姉 妹 母

どこ行くん？

それどこ持って行くん？

どこって、そこ、下に隠しとくんよ、なんね。

姉、母が持っている箱を一緒に持って。

母

なんね、大丈夫たい、重たいけかーちゃんが持って行くけ。

妹も箱に手をかける。

母

なんねなんね、持ちきらんめーも、貸しって。

姉妹離さない。

母も離さない。

母 姉 妹 母 姉

なんね離さんね、そこに置いとくとよ。

かーちゃん一人で食べるやろ。

かーちゃん宿題食べてしまうん？

食べんよ食べんよ、食べきれんよこんないっぱい、食べきれんって。だけ

ほら離さんね。

いやや。

妹 姉 妹 母 妹 母 妹 母

離して。

いやや。

離してほら。

持っていかなで。

離して、(わざとぐらついて) ほら危ない！

持って行かなで。

持って行かなで。

持って行かなであたし達の宿題。

母と姉妹、次第に激しく押し問答。

母 姉 母

なんねって、かーちゃんが隠しとくけ離せっていいよるとたい。

かーちゃん一人で食べそうやけやらん。

なんね、かーちゃんがあんたらから泥棒するみたい言いなさんな。すかん

ねーこん子は。

かーちゃんせこいばい。

せこい？あんだかーちゃんに向かってせこいってなんねせこいって。

せこい！離して！

離さんって！

離して！

離さんって！って、ちよつちよ、あんたらなんねその力、離せこの。

はなさん！

離せ！このやろう！

かーちゃん泥棒や！

かーちゃんが泥棒やん！

取って来たんあんたやろ、泥棒はあんたらしい「すいませ〜ん、ここに泥棒がいますよ〜」離せこの泥棒娘達！

あー！あー！、かーちゃんが泥棒娘っていったあー！、あー！あー！。

泣かんでいいやんねって！

あー！あー！、かーちゃんに泥棒って言われたあー！あー！。

いや違うつたい、ちゃんと隠しとくってかーちゃんが、一人で食べたりせんって！、泣かんでよかろーもん。

今や！

妹、母がひるんだ隙に箱を取る

あ！、返せ！このー！返せ！

母、逃げる姉妹を追いかけて回す。

ドロボー！泥棒娘！返せ！

嫌や！返さん！

妹 母

母

姉 母 姉 母 妹 母 妹 姉 母 姉

妹、箱を持って逃げ回る。

母
返せ！って、あんた一人で箱持つとるやないの！も一個どつか隠しとろー
が！出せ！返せ！

玄関の戸が叩かれる音がする。
母は慌てて浴衣を整える。

母
はーい。
組長
こんばんわあー、組長やけんど。
母
はーい。
妹
ああ、重たい！

妹、箱を下ろす。
母、戸を開ける。

組長
なんね、大声出してから、どげしたんね。
母
いやなんにも。で何ね？こんな時間に。
組長
あんたんとこで何も取つとらんやろね。
母
は？

組長 陸軍倉庫からたい。取って来とらんやろね。

組長、部屋の奥に箱が置いてあるのを見て。

組長 あれなんね、取って来たんね。

姉妹、部屋の隅に隠れる。

母 なんね、いけんのね？みんな取って来とるらしいやないの、いけんのね。

組長 いけんやろ！

母 なんねあんた。

組長 なんねってなんね。まあいいたい、気をつけちよきよ、もうすぐアメリカ

兵が調べに来るつちゅうけね。

な、な、なんね、脅しね。

脅しやないたい、そう言う話が回ってきちよるとたい。

母 アホみたいな顔してアホみたいなこといいんな。そんな恐ろしい事あつてたまるか。

組長 なんね、あんた、折角心配して教えてやりよるのに知らんけんね、取ったん見つかつたら俺も庇いきれんけんね、隠すか、逃げるか。

母 あんたは？

組長 は？

母 あんた取つとらんとね。

組長 取るね、そんな。泥棒やないね。

母 泥棒扱いすんな。

組長 あんたんとこ子供おつたつて酒井さんが言いよるとたい。

母 はあ？

組長 子供に取りに行かせてからつて。

母 はあ？？あのクソババア。

組長 子供にとつてこさせたんね。

母 だれがそんなことするか！あたしが取つてきたんたい！

母、奥から箱を抱えて来て組長に持たせる。

母 こんな重たいもん子供だけで持つて来れるね？、ええ？ねつて！

組長 (箱の中を見て) 乾パンね。

母 そうたい乾パンたい。

母、部屋の奥を見て

母 (娘達に) 奥行つときなさい！

母、組長に近づき

母 本当ね？

組長 何がね、

母 アメリカ来るってほんとね。

組長 アメリカが門司港に上陸したって話で、やからそういう噂たい。

母 噂っちなんね、本当の話ね。

組長 知らんたい

母 なんね、どっちなんね。

組長 そげんおびえるごとあるなら取りに行かせなさんなよ、ましてや子供に。

母 子供やないっちゃ、取って来たんあたしやけ。

組長 取った事には変わりなかるうもん。

母 ねえ、組長さあくん。

組長 な、なんね急に。

母 違うんよ。ねえ。違うやろお。

組長 なんが違うとね。

母 だけん、違うっちゃ、ねえ。えええ、ねえ。

母の浴衣をはだけさせる。

母 組長さあくん、ちよつと口開けてん。

組長 え、なんね、ちよつと、そんな、なんね、ちよちよつとむ、胸があたつとるけ。

母　ねえ、ちよつと口開けてんって。

組長、口を開ける、開けた口に母が乾パンを一個入れる。

母　食ったー！食ったー！見たか！幸子！優子！見たろ！今見たろ！

姉妹　見たー！

組長　なんね、何入れたんね！

母　乾パンたい！これであんたも同罪たい！

組長　（乾パンを吐き出して）やめんね！

母　も、もつたいなかるーも！

母、落ちた乾パンを拾って食べた。母、組長の耳元で、

母　だけん取って来たんあたしやけ、覚えちよきよ。取って来たんはあたしやからね。

組長　わ、解つたたい。

母　あんたん力でうちとこだけ来んようにできんとね。

組長　そんなことできるね。来たら一軒一軒見て回るくさ。

母、浴衣をずらし肩を出す。

組長

やめんねって！。

母

ほら、谷間が見えとろ？ねえ、見えとろ？

組長

(谷間を凝視しながら) やめ、やめねって。

母

触ってもいいとばい。

組長

そらいけん、そらいけんばい。

母

大きかる？ねえ、大きかる？

組長

そらいけん、そらいけん。

母

なんね、根性無しが。

組長

ま、まあ、今晚来るかは知らんけど、なんか自分らで考えちよかな取った

ん見つかつたら俺もかばいきれんきね。俺はまだ他回らないけんね、ほ、ほ、ほなね。

組長、去る。

娘達出て来て。

姉

かーちゃん。

母

かーちゃん。

姉

あのボンクラ組長のバカたれがほんつと。役立たん癖に。どっちも立たん

母

かーちゃん。

・
・
・

母 姉 妹

ねーちゃんと返してくる。
返してくるけ。
返さんでいい！

母、モンペに着替える。姉妹はそれを見ている。
着替え終わり、玄関を開け、また閉める。
母、乾パンの入った箱の前にゆっくりと座り。

食べるよ。

え？

食べるよ全部。

乾パン？

アメリカがくる前にこれ全部食べてしまおうよ！

・・・うん！

うん！

三人、乾パンを口にはおぼる。

かーちゃん！

(乾パンを口に入れたまま) なんね！

(乾パンを口に入れたまま) 無理やろ！(口から出す)

姉 母 姉

妹 姉 母 妹 母 姉 母

姉 母 妹

(乾パンを口に入れたまま) 無理や！固い。飲み込めん。(口から出す)
(乾パンを口から出して) 無理か……。よし！米びつ持ってこい！
うん。

姉、台所から米びつを持ってきて蓋を開ける

母 妹 姉

ちよこつとしか入つとらん。
(米びつを覗き込んで) 本当や。
よし、乾パンでいっぱいにしちやる。茶碗持ってき！

妹、茶碗を持ってくる

母は米びつに入った米を茶碗に移し乾パンを米びつに入れる。

母 妹 姉 母 姉 妹

入りきらんね……。
米びついっぱいになったな。
入りきらんな、まあ入りきらんとは思ったが……。
初めて米びついっぱいなん見たな。
そうやな、乾パンやけどな。
本当やな、やったな。(姉妹に) ほい、口開け。

母、姉と妹の口に乾パンを一個ずつ入れる。

母 妹 姉

母も一つ食べる。

母、妹の首に巻いてある手ぬぐいをほどいて米びつにかけ、その上に茶碗に移した米を薄く敷く。

かーちゃん。

かーちゃん。

大丈夫たい。見つかりやせん。

姉、箱の中を見て。

妹 母 姉 妹 姉 母 姉 母 妹 姉

まだあるよ。

どうするん？

・・・枕持ってき。

枕？

あんたらの枕たい、持ってき。

かーちゃん・・・。

凄い。

かーちゃん凄いはい。

そうやろー、凄いやろ。

この状況で寝るん？

母 だれが寝るか！アホか！枕ん中のそば殻抜いて変わりに乾パン詰めるんたい。
姉妹 あーねー、なるほどねー。
母 早よ持つてき！

母は箱の中の乾パンを出し、娘達が持つて来た枕の中身を箱の中に移す。
母 なんしよんね、早よ詰めんね。

姉妹、母、空になった枕に乾パンを詰めだす。

母 よし、それ詰めよき。

母、米びつを持つて台所へ。

姉妹、詰めながら

姉妹 姉妹 姉妹 姉妹 姉妹
かーちゃんいっつも汁だけやったけ。かーちゃんに食べて欲しかってから。
でもかーちゃんが全部つてのはなんかいやや。
ねーちゃんもかーちゃんに持つて帰るって言いよったやん。
でもかーちゃん全部取る気やったし。
ねーちゃんケチや。
ケチよ。かーちゃんの子や。

姉 妹

ねーちゃん。
なんね。

間

間

暗くなる

姉 母

消すよ。
うん。

姉妹布団に入る。

妹 姉 母 妹 姉 母 妹

あたしもや。
詰めたね？
うん、
うん。
そしたらそれ枕にして寝り。
はい。
はい。
はい。

姉 妹
頭、ゴツゴツするな。
我慢し。

間

母 妹 母 姉
かーさん寝らんの？
んんん。
寝らんの？
んんん。

暗闇の中カリッカリッつと音がする。

姉
かーさん？

返事が無い。

妹
かーさん？

返事が無い

母 姉 妹 母 妹 姉 母 妹 母 姉 母

姉、明かりをつける。

母は片手に棒。脇に米びつを抱えて、口の中が乾パンでいっぱいであることを言っているのか聞き取りにくい
親子、対峙する。

いやいやいや違う違う、これは違うよ。
なんが違うと。

これはあんたらが思ってるような事じゃないとよ。
食べたろ。

食べてないよ。

どう見ても食べとろーもん！

カリカリカリカリいいよたろーもん！

食べてないよ。

それ、口に入っとるやん！

ネズミみたいな事してから！

な、な。なんねネズミっておかあさんに向かつて。

姉は米びつを奪いに母に向かう。

妹も姉に続く。

母

なんねなんねってそんなおかあさんネズミ扱いしてから。違うって、これは違うとよ。こうせないけんめーも、こーやってからしとかな、ね？ちよ、ちよと待ちって。

母逃げる。

姉妹、母を追う。

母

何ねって、違うっていいよるやんねって、待ちって、ちよと待ちって！

あ！あ！あ！あ！あ！ハエ！ハエ！

そんなん騙されん！

そんなん騙され．．．あ、本当や！ハエや！

え？

飛びよるやんね、そこ！、ほらそこ！ハエ！

本当や！ハエや！

姉 母 姉 妹 姉

三人ハエを目で追う。

しばらく見て、ハエは米びつの上に止まった。

母 妹

止まった！

動くな！、動くなよー！

母は棒を振りかぶって振り下ろす。

姉妹

かーちゃんー！

母、手を止める

なんねー！ハエ逃げたやんねー！

だって叩いたら米びつ割れとったやろーもん。

乾パンバラけたらあとどこに隠すん。

うわそーや、危ないところや、止められんかったら

母、振り返り、乾パン一つ食べる

ほんと割れとったな、危なかったな。

待って。

・・・。

なんで食べるん？。

・・・。

なんで今食べたん？

見えた？

見えたもなんも今食べたやん。

母 姉 母 姉 母 姉 母

母 妹 姉 母

母、また食べる。

姉 だけなんで食べるん？

母 いや解らんね。(また食べる)

姉 食べんでつて。

母 (食べる)

姉 もう！食べんでつて！いいよるやん！つてあんだなんしよん！

妹、枕を抱えて乾パンを食べている。

姉 もう！なんなん！

カクテルの色／小倉 スタンドバーにて／ 作 鶉飼秋子

【登場人物】

峯子

芳江

男 1

男 2

男 3

ある女

昭和三十五年頃。小倉のあるバーで。

カウンターがありテーブルがある。

カウンターにひとり誰かが座っている。

ある女である。

ある女の存在は感じ取れるものの、姿や顔ははっきりと見えない。

男1 おいつ！ハイボールふたつね。
芳江 え。
男1 何。
芳江 いいえ。
男1 大丈夫、飲めるさ。美味しいよ。
芳江 でも、大丈夫かしら。
男1 なに。
芳江 飲んだことないから。
男1 え、酒？
芳江 いえ、ハイボール。
男1 酒は飲んだことあるよね。
芳江 はい。
男1 シュワつとしてさ。ウイスキーつてのもいいんだ。
芳江 ええ。
男1 強くない、強くない。ソーダで割ってるんだから。くつと飲んでみな。
芳江 はい。
男1 飲めなかったら僕が飲んであげるから。
芳江 え？
男1 なんだったら、飲んじゃったのも全部吸いこんでやってもいいよ。
芳江 ・・いやよお。
男1 本当だよ。

芳江
男1
芳江
男1
峯子
男1

いやよ、いやよお。

知らないの。できるんだよ。

知らないわ、そんなこと。

へえ、何にも知らないんだな。

駄目よ、からかっちゃあ。

ん？

彼女、困ってるじゃない。

からかってなんかいないさ。

あら、そう？

君も、何か、頼もうか？

私はもう頼んだわ。

何？

ハイボール。

それなら、一緒に頼めばよかった。

いいわよ、別に。

一人で飲むよりもさ、一緒に飲むよ。

私が口を挟む隙なんてこれっぽっちもないじゃないの。

そんなことないよ。

お邪魔虫になんかなりたくないもの。

そうなの。

そうよ。

男1 それなら僕が話しかければ良かったなあ。
え。

男1 君にどうやって話しかければ良かったかって、ずっと考えてたんだ。
嘘ばかり。

男1 本当さ。

峯子 ふふ。また、あとでね。

男1 ん？

峯子 彼女とゆっくりお喋りするの。ね。

芳江 はい。

男1 ああ。じゃ、あとで。

男1、二人の元を去る。

峯子 どう。

芳江 カッコ良い。

峯子 そう？

芳江 すごく、良い。

峯子 そう。

芳江 はい。

峯子 よっちゃんも良かった。

芳江 本当ですか。

峯子 「いやよ、いやよお。」特に良かった。
芳江 ミネさんの、「お邪魔虫になんかなりたくないもの」カッコ良かったあ。
峯子 ふふふ。
芳江 ふふふ。

ハイボールが3つ出てくる。

芳江 あの人の分、どうします。
峯子 もらっちゃえばいいわよ。
芳江 そうですね。
峯子 うん。じゃあ。
芳江 はい。
峯子 飲んでみようか。
芳江 はい。
峯子 せーの。

二人は、ハイボールに口をつける。

芳江 わ。苦い。
峯子 唇がピリピリする。
芳江 これがウイスキー？

峯子

うん、そうね。

芳江

へえ。

峯子

あとで、カクテル頼みましょう。

芳江

はい。

峯子

そっちの方が美味しいもの。

芳江

はい（頑張ってハイボールをもう一度飲む）

峯子

明日誕生日ね。

芳江

あ、はい。

峯子

二十歳、おめでとう。

芳江

ありがとうございます。

峯子

お酒の味はどうですか。

芳江

ええ、なんとというか鼻につんときます。

峯子

うん。

芳江

峯子さん、ここにはよく来るんですか。

峯子

今日が3回目。女だけで来たのは、今日が初めて。

芳江

そうですね。なんだか緊張しますね。

峯子

そうですね。でも、黙って飲んでればいいのよ。

芳江

はい。

峯子

そのうち誰かが声かけてくるかもしれないけど、さっきの調子で。

芳江

いやよ、いやよお。

峯子

それ。腰を、こう、入れて、腕を、こう、ななめの方向に、なんでも、ひ

峯子

ライターで。

芳江

火をつける。

峯子

・・・さすが。

芳江

さすがですね。

峯子

いいわー。

芳江

私、明日、タバコ吸ってみます。

峯子

えっ。

芳江

はい。

峯子

タバコってまずいのよ。

芳江

でもカッコ良いじゃないですか。

峯子

うん、そうね。

芳江

ええ、そうです。

峯子

明日から、タバコも解禁だものね。

芳江

はい。

峯子

一緒にマネしてみようか。

芳江

そうしましょう。

男2

二人のもとに男性がやってくる。

峯子

ミネさん。

男2

あら裕太郎さん。

男2

こちらは。

峯子

商業高校時代の私の後輩。芳江さん。

男2

芳江さん、僕はね、ミネさんの会社の同僚。

芳江

こんばんは。

男2

二人で来ているの？

峯子

ええ、そうよ。

男2

へえ。

峯子

どこに居たの。

男2

あっちのほう。

峯子

誰かと来たの。

男2

いや、ひとりだ。そろそろミネさんが来るんじゃないかと思ってたよ。

峯子

嘘ばかり。

男2

いや、何度かばったり会ったことあるじゃない。

峯子

そうだったかしら。

男2

ばったりが今日もあるんじゃないかと思ってさ。

峯子

・・ふん。

男2

何の話してたの。

芳江

いえ、あの女性の話を。

男2

ああ、あの二人。

芳江

おしゃれですねって。

男2

あんまり大きな声で話すもんじゃないよ。

芳江
え。

峯子
何よ。

男2
女は、コレ（頬に指で線をスッと引く）もんの娘だよ。

峯子
ええ？

芳江
そうなんですか。

男2
間違いない。俺はあの女がこの先の交差点で黒塗りの車に乗り込むところを見たんだよ。

峯子
タクシーに乗っただけじゃないの。

男2
いや、車は女を何時間も待ち続けてるんだよ。

峯子
ふうん。

芳江
この店に何をしに来てるかしら。

男2
さあ、喧嘩してる組のチンピラが来やしないかって張ってるんじゃないか。この店に。

男2
ああ、父親の言いつけでさ。そんなことでもなけりゃ、毎日毎日こんなところに来ないよ。

峯子
そんな訳ないじゃない。

芳江
そうです。きつと誰かが好きで毎日来てるとか。

芳江
そうよ。この中にいるのよ。

峯子
意外とマスターだったりしてね。

男2
ハッ。お姫様方は能天気だなあ。まあ、もし、そうだったとしても、男は「はい」とも「いいえ」とも言えないんだな。

芳江

どうして

男2

女はコレもんの娘だよ。どつちに転んでも怖いじゃないか。あんなだけのべっ

ぴんさんでも、男は無理だ。

峯子

絶対そんなとは違うわよ。

ある女は席を立った様子。

男2

お。

三人は、ちよつと身構える。

ある女、一方を見据えているよう。

男2は、ある女と同じ方向を見てボクシングの構え。

ある女、座った様子。

男2は、ある女が座ったの見届けると、構えをほどく。

峯子

何なのかしら。

男2

ちよつと戻るね。

峯子

え、何よ。

男2

あつちに友達いるんだ。

男2、席を立つ。

峯子 失礼なやつ。

芳江 あの人、良いんじゃないですか。

峯子 ああいうの好み？

芳江 ミネさんと。

峯子 嫌よ、あんな粗い男は。

芳江 そうですか？

峯子 そうよ、だって、あの人ที่そんなヤクザなワケないじゃない。

芳江 ええ。

峯子 あの人にはね、なんかもっと深い深い事情があつてあそこにいるの。

芳江 事情ですか。

峯子 そうよ、ああして黙つて座つてなきやいけない事情があるのよ。

二人のもとに、また別の男性がやってくる。

男3 ヨッコ！

芳江 え。

男3 ヨッコだろう。

芳江 あ、正弘さん。

男3 どうしたの、こんなところで。

峯子 こんばんは。

男3 こんばんは、こちらは。

芳江 高校の時の先輩なの。

男3 僕はヨッコと幼馴染の正弘って言います。

男3 よろしく、私は峯子。

男3 ヨッコ、こんなところに来たらダメだ。

芳江 どうして。

男3 ここは、ヨッコみたいな子供が来るところじゃないんだよ。

芳江 私、もう子供じゃないわ。

男3 いや、子供だよ。とにかくヨッコみたいな世間知らずが来る場所じゃない。

男3 さあ、帰ろう（芳江の腕を掴もうとする）

男3 ちよつと、ちよつと、ちよつと。

男3 何ですか。

男3 いきなり来て、あんまりじゃないの。

男3 ここはヨッコに似合わないんです。

男3 あら、ヨつちやんだって、もう立派な大人よ。

男3 そうよ、今はミネさんと二人で飲んでるんだから。

男3 そんなに心配しなくても大丈夫よ。

男3 ヨッコ、あの女の人見てみな。

男3 え、あの人。

男3 小倉じゃちよつと見ないような女だろう。銀座から来た、歌手なんだよ。

男3 え、歌手なの。

峯子
それ本当？

男3
そうですね。銀座じゃそりゃあ有名なサックス吹きに見初められて、パー
トナーとして育てられたんです。

峯子
ねえ、じゃあ、あの人やつぱり東京から来たのね。

男3
そう、銀座じゃ名の通った歌手ですよ。けどね、ある日サックス吹きの男
に捨てられて、突然コンビは解消。それから、急に人気がなくなつてね。
どうして、小倉までやってきたのよ。

男3
男を求めて追つてきたんです。一度見た夢はそうそう諦めきれもんじゃない
ない。男にすがるしかないんだ。

峯子
それじゃ、なんだか可哀想じゃない。

男3
そうですね、そのうち諦めて誰か別の男を見つけてすがるんでしょうけど。
だからね、ヨッコ。こんなみじめつたらしいところに来るもんじゃないよ。
女もそうだが男だつて良いやつばかりじゃないんだからね。

ある女、カウンターのテーブルの上で、指をコツコツと鳴らしている様子。

男3
ほら、あれはブルースのリズムだよ。

芳江
確かに音楽のように聞こえる。

峯子
祇園太鼓のリズムじゃないの。

男3
男に教えてもらった音楽が忘れられないんだ。

芳江
ねえ、そういえば、正弘さん。あなたの音楽はどうしたの。

男3

うん、ああ。

芳江

そういう大学に行ってるって聞いたけど。

峯子

音大生？

男3

ああ、それはね、うん、まあ、ボチボチだ。

芳江

その話を聞かせてちょうだいよ。

男3

そうだねえ。作曲かなんかをやっているよ。

峯子

すごいじゃない。

男3

まあね。今日は友人と来てるから、その話はまた今度。

峯子

え？

男3

じゃ。

男3は、二人の元を去っていく。

峯子

急に、血相変えて

芳江

彼、音大、中退したんです。

峯子

そうなの。

芳江

噂で聞いたんですけど、本当だったんですね。

峯子

ああ、それでね。

芳江

見栄張っちゃって。

峯子

でもさ。

芳江

はい。

二人

東京で一つ銀座で一つ
若い二人の命を賭けた
真実の恋の物語り♪

峯子

ね！

芳江

はい！

峯子

やっぱり本気の恋をしてるのよ。だけど、なんでか秘密にしてなきやいけないの。

芳江

それで、ああやって毎日のように黙ってあの席に座ってるんですね。

峯子

そう、ああやって黙ってなきやいけない事情があるから、だからこそ色気があるの。

芳江

うん。

峯子

絶対誰かに恋してるのよ。

芳江

だけど、それを誰にも打ち明けられないんですね。

峯子

ああ、相手の男の人ってどんな人なのかしら

芳江

きつと素敵な人なんでしょうね。

峯子

はあ。(ため息)

二人のもとに、男1がやってくる。

男1

どうだい。

峯子 あら、さっきの。

男1 さっきから、男が出たり入ったりしてるみたいだけど。

芳江 ただの知り合いです。

峯子 うん、そうなの。

男1 ふうん、君たちはモテるんだなあって見てたんだよ。

峯子 今日はやけに知ってる顔に会う日ね。

男1 まあね。ここに来れば、たいていは知ってる顔だよ。

芳江 そうなんですか。

男1 若者が遊ぶところなんて決まってるじゃないか。昔から知った顔もよくあるし、ここで新たに知る顔もある。しかし、いつの間にかは皆、知った顔だ。ねえ、じゃあ、あの人のこと知ってる。

男1 ん？

芳江 カウンターに座ってる。

男1 ああ。あの女は売春婦。

芳江 え。

峯子 ちよつと、何よそれ。

芳江 そうですよ、あんな気品にあふれた人が、そんなわけ。

男1 知らないのかい。以前の赤線はもうないんだよ。最近はね、ああいう女がバーに潜り込んで仕事をする。女たちは職場を失ったんだ、そりゃあ必死だよ。

峯子 . . .

男1 芳江

・・・
君たちは可愛いんだなあ。

そこに、男2がやってくる。

男1

おお。

男2

何の話してるの。

男1

あの女。

男2

・・ああ。

男1

ほらね、みんな知ってる。

男2

さっきも言ったんだ、そんな大きな声で話すもんじゃないよって。

男1

ああそうだ。

そこに、男3がやってくる。

男3

何の話。

男2

おお、学生。

男1

あの女。

男3

・・ああ。

男1

ほうら、こちらも。

男2

こんなに近くで話すような話じゃねえよなあ。

男3 ええ、あの人が可哀想です。

男2 うん・可哀想？

男3 好奇の目にさらされて。

男2 ああ、そりゃそうだ。

男1 御もつとも。

峯子 ねえ、私、御手洗いに行つて来る。

芳江 ええ。

峯子 あの人がそんなつまらないわけじゃない！

芳江 そうですよ。

峯子 ああ、どうにかしてひと泡吹かせてやりたい。

芳江 うーん。

峯子 ヨっちゃん、どうにかあいつらを言い負かす方法を考えるのよ。

芳江 はい！

峯子は、トイレに向かつて席を立つ。

芳江は、男たちの話を聞きながらも、黙って見ている。

ある女も、席を立ちトイレに去った様子。

話が盛り上がっている男たち。

男2 なあ、俺たちは静かにして、そつとしておこうぜ。

男3 そうです。邪魔したらいけないんです。

男1 こっちが邪魔しなくなつたって、そのうちあつちからお声がかかるさ。

男2 自分を買ひ被るなよ。

男1 心配せんでもお前みたいな乱暴ものにはかからん。

男2 ふん、言つてろ。

男1 あのような女は力ではどうにもならんだ。

男2 今に見てろ、かかるなら俺だ。

男3 二人とも何を言つてるんですか。

男1 お前にはかからん。

男2 ああ、そりや間違ひなく。

男3 この中で音楽的センスに長けているのは僕です。そのセンスときたら小倉イチと言つても過言ではない。

男2 なあにが、音楽的センスだ。男はな、喧嘩だ喧嘩。

男1 君たちは、わかっていませんね。これからの男はトーキング。それに尽きます。

ある女、トイレから戻ってきた様子。

カウンターに誰か座っているのが見て取れる。

男たち、黙つてそれを見る。

ある女、突然。

ある女

好き。

と、大きな声で公言するかのよう。
ある女、テーブル席の方に振り返ったかのように。

ある女

私には、これが、精一杯、です。

店内が静まりかえる。

ある女は、一瞬のうちに扉を開け、店から出ていく。

扉が静かに閉まる音。

男たちは、それぞれの意志で扉に駆け寄る。

男2

なにしてやがる。

男3

そっちこそ。

男1

関係の無いものは、引っ込んでなさい。

男2

何を？やるか！やるのか！（こぶしを構える）

男3

関係がないのはあなたたちの方です。

男2

お前は黙ってろ。

男3

黙ってなんかいません。あの人に打ち明けられたのは僕なんですから。

男2

ふっバカめ。

男1

勘違いも甚だしい。

男3

この前、一緒にコンビやらないかって誘われたんです。

男2
はあ？

男3
僕はラッパは吹けない、ピアノしかできないって言ったんです。でも、楽器は関係ない、あなたにはシンフォニーのセンスがあるからって。

男1
なにそれ。

男3
僕に話してくれたんです。男に捨てられて今は真っ暗だったこと。あらたなパートナーを探してることに。僕が新しい光かもしれないってこと。

男2
おいおい、話が見えない。

男1
なに、世迷言・・・、

男2
じゃあ俺が打ち明けられたのは、なんなんだ。

男1
ああ？

男2
私はふつうの女の子なのよ。組の娘ってだけなのに、どうしてみんな私のことを避けるのかしら。あなただけよ、私のことを怖がらずに話かけてくれるのは、って。

男3
ええ？なんですか組ってのは。

男1
好き勝手言ってくれるじゃねえか、俺が打ち明けられたのはなんなんだ。

男2
え、お前も？

男1
アタシ、できればこんな仕事したくない。だけど、病気のおつかさんがいるから働かないわけにいかないの。うんと稼いだら、きつと男に買われるマネなんてしないから、それまでアタシのこと見てて頂戴、って。

男3
え、買う？買うって？

男2
ウソだろ。

男3 何ですか。

男1 ・・俺たちは、その。

男2 食わされたんだ。

男3 ・・・。

沈黙

芳江 ねえ、あなたたち。これ、知ってる？

男2 なんだ。

芳江 あの人ってね、とっても良い趣味をお持ちなの。

男1 あ？

芳江 ダンスホールにいつも一緒に踊りに来る人がいるのよ。そして、二人でタバコを吸う瞬間に少しだけ話をするの。「今日はどんだけの男に嘘をつけるか」って。

男2 ああ？

芳江 あれって夫婦よね。人を騙して遊んでるの。浮ついた男をたぶらかすのを見て優越感なの。今頃「今日もカマかけてやった」って男とほくそ笑んでるわよ。

ふと、手洗いから女が出てくる。

女は、空いていたカウンターの席に腰掛ける。

女は、ある女と雰囲気が似ているのか、みな、女を凝視する。

峯子

あら、タバコが切れたわ。

男たち、その女がある女でないことに一瞬で気がつく。

男2

くそ。

男1

俺としたことが。

男3

どういうことなんですか。

男2

いくぞ。

三人の男、扉を開け、追いかけるようにして外に出ていく。

静かになった店内。

峯子

カクテル、頂戴。

峯子はバーテンダーに向かって声をかける。

芳江

峯子さん！私、私、やってやりました。

峯子

何、どうしたの。

芳江

どうしたのじゃないです、ちゃんと峯子さんの演技に乗っかって、嘘をつ

峰子 いたんです。私、ちゃんとカッコいい感じだったと思います。
何のこと。

芳江 え？

峰子 え？

芳江 いえ、あの、さつき、ここで大きな声で告白したでしょう。あの人を装って。

峰子 はい？

芳江 え。

峰子 ……

芳江 ……してませんか。

峰子 私、今、戻ってきたばかりじゃない。

芳江 あれ、あれって峯子さんじゃない、ですか。

峰子 誰か、ここで告白したの？

芳江 ええ、あの女の人が。ここで。それで、みんな、なんだか騙されたって話
になつて…私は、そこで、だめ押ししてやって…。

峰子 あら。

芳江 私、てつきり峯子さんがひと泡吹かせてやろうって、それで…。

峰子 ああ！私、良いところを逃してしまったのね。

芳江 え、じゃあ。あの女の人は…？

峰子 出て行ったんじゃないの？

芳江 ええ。そうです。あれ、峯子さんは。

峰子 私はここにいないじゃない。

芳江 ええ……。

峯子 あの人が告白。告白をねえ……誰にしたのかしら。

芳江 そうなりますね。誰か好きな人が本当にこの中にいたってことになりま
す……。

峯子 このなかー？

芳江 あの、お手洗いでは、会いませんでしたか、あの人に。

峯子 会わないわ、ここのお手洗いって一人しか入れないのよ。

芳江 ・・・そうですか。

峯子 あ、ね、何頼む、私はバイオレットフイズを。

芳江 え。

峯子 カクテル飲んでみない？

芳江 あ、はい。

峯子 何にする。

芳江 ええと、なんでも。

峯子 じゃ、ピンクレディ。

カクテルが、二人の前に出てくる。

芳江 わあ、綺麗。

峯子 藤色と茜色。これ（藤色）、あの人がいつも飲むお酒なの。

芳江 へえ。じゃあ、こっちは？

峯子 それは、私が好きなお酒。

芳江 うん、素敵。

峯子 乾杯しましょ。

芳江 はい。

峯子 じゃ、

ふたり 乾杯。

グラスがぶつかり、チンと音が鳴る。

二人になる店内。

芳江 あの人って本当にいたのかしら。

峯子 え、いるに決まってるじゃない。見たでしょう。

芳江 ええ。でもさつきまでのことが夢みたい。

峯子 また日を変えて来たら、またいつもと同じような景色よ。あの人もきつと

ここに座ってるわ。

芳江 そうなのかしら。

峯子 それで、私も、いつか本物の恋に出会ふの。

芳江 あ、銀座、ですね。

峯子 「あら、タバコが切れたわ」ってそんな感じだったでしょう。

芳江 ああ、さつきの、それだったんですか。

峯子 そうよ、銀座よ。

昭和12年7月31日

作 藤本瑞樹

【登場人物】

鬼村（おにむら） 八幡製鉄所硬式野球部・主将
山久（やまひさ） 八幡製鉄所硬式野球部・捕手
坂田（さかた） 八幡製鉄所硬式野球部・監督

昭和12年7月。

八幡製鉄所の硬式野球部は、都市対抗の全国大会まであと一步のところまで来ていた。

球場の控え室。

主将の鬼村をはじめとする選手たちが、まもなく始まる試合に向けて、準備をしている。

捕手の山久が、投手の角田と会話している。

山久

角田。今日セツさん来とるとやろ。ええとこ見せんといけんな。は？バカなん言いようとか。捕れるちゃ。どんな球でも捕るちゃ。当たり前やろ。バカ。は？ふざけんなお前。……お お出してみ、140キロ超えたらお前、メシ奢つてやらあ。ハッ、出たことねえやろ140キロとか。無理無理。……。まあな、勝ちゃいいんやけどな。は？ 勝つたら奢れてお前アホか。なんで俺がお前に奢らないかんとか。……。勝つのは当たり前や。ここまで来たたら、絶対 勝つ。絶対勝つんやけ、お前俺が奢るのおかしいやろ。……。クラブ？ああ、あれはな、まだ使わん。神宮で使う。取つとる。おー。いいけ、わかつたけ。もしほんとに出たらや ぞ。考えとけよ。なん奢つてほしいか。……。は？羊羹？羊羹で、クロガネ羊羹か？……。ああ、いま食いたなってきた。バカ、お前がいらんこと言うけちゃ。

主将の鬼村が、なかなか試合に出られない若い選手、落合と話をしている。

鬼村

ああ。そうやな。とうとう、決勝まで来ることができた。……みんなのおかげよ。落合。お前は、まだまだこれからや。伸びるんは今からよ。焦るな。気持ちにはわかるけど、焦るな。お前は、いいもん持つとる。……。そうよ。お前みたいな選手がベンチにおけるのは八幡製鉄の強みよ。選手の層が厚いけ、俺たちも安心してプレーできる。八幡製鉄が、野球も、今からの日本も、引っぱっていくちことを、見せてやろう。……。俺たちが、みんなを神宮に連れていくけ。うん。あと一勝。がんばろう。

監督の坂田が、試合前に選手全員を集めて話している。

坂田

ここまで来た。途中苦しいところもあったけど、とうとうここまで来た。あと一勝！あと一勝や！氣い抜くな。氣い抜くなよ。お前たちがこれまでやってきたものをすべて、この試合にぶつけるんや。なんとしてでも神宮に行くぞ！そして、全国行って、黒獅子旗を八幡に、……。その前に、まず一勝や。今日の、一勝や。……。よし。行こう。野球を楽しもう。楽しんでこよう。

全員、グラウンドに向かう。

大谷球場のグラウンド。

鬼村と山久がキャッチボールをしている。

山久はグローブをしておらず、素手で球を受け止めている。

そのため、ボールの勢いは緩やか。

以下の会話は、ずっとキャッチボールをしながら行われる。

鬼村

いい、天気やな。

山久

そうですね。

鬼村

ちゃんと寝たか？

山久

ああー……、

ふたり、考える。

山久

いまパッと出てきたんは、……くろがねですね。

鬼村

くろがねな。羊羹な。

山久

なんかあの甘さを、

鬼村

あれな。

山久

……。

鬼村

……。

山久

……。

鬼村

……思い出すよな。

山久

はい。

鬼村

お前のせいで食いたなってきたやん。

山久

すいません。

鬼村

買ってこい。

山久

ええー。

鬼村

冗談よ。

山久

いやでも、ほんと食いたいですね。

鬼村

うん。

山久

言うんやなかった。

山久 自分は、もう使えんけですな。

鬼村 ……。

山久 ……。

鬼村 そうか。

山久 はい。

鬼村 お前たちは、

山久 ……。

鬼村 いいバッテリーやった。

山久 ……。

鬼村 角田があそこまで投げたのは、

山久 ……。

鬼村 山久、お前のおかげや。

山久 ……ありがとうございます。

鬼村 信じられんな。

山久 なにがですか。

鬼村 いまここにおることとか、お前がここにおることとか、天気とか、なんか、いろいろよ。

山久 そうですね。

鬼村 いつか？

山久 え？

鬼村 いつ届いたとか？

鬼村
山久
鬼村
山久

……そうか。

はい。

そうか……。

……。

鬼村、去る。

戻つてくると、グローブをひとつ持っている。

投げて山久に渡す。

山久

……。

つけれ。

……はい。

鬼村
山久

しばし無言でキャッチボール。

スパン、スパンという小気味よい音だけが響く。

山久

やっぱり、

鬼村

？

山久

この感触、

鬼村

ああ、

山久

これですね。

やがて、鬼村は靴を脱ぐ。

山久も靴を脱ぎ、ふたりは裸足になる。

ふたりは黙って、それぞれ思い思いに大谷球場の土の感触を足の裏で確かめている。

鬼村 あったかいなあ、土。

山久 はい。

鬼村 熱いなあ。

山久 はい。

鬼村 熱いなあ。

山久 ……。

鬼村 熱い。

山久 ……。

鬼村 山久。

山久 はい。

鬼村 ピッチャー、やってくれ。

山久 ?

鬼村 たまには、投げるほうもいいやろ。

山久 ……はい。

山久がピッチャーマウンドに行くと、鬼村はバッターボックスに立つ。
鬼村は、バットを構える振りをする。

鬼村

来い！山久！

山久は黙ってうなづく。

山久、大きく振りかぶって、鬼村へボールを投げる。

鬼村はバットを思い切り振ったかと思うと、一塁へ走り出す。

一塁から二塁、二塁から三塁、そして、ホームへ。

鬼村は全力で駆け抜ける。

山久

……。

鬼村

見たか山久！

山久

……。

鬼村

ホームランや！

山久

……はい。

鬼村

俺の、……最後のホームランや！

山久

……はい。

鬼村

監督！

山久

……。

鬼村

見とったですか！俺のホームラン！

山久
鬼村
山久

……。
次。お前の番や。
はい！

今度は鬼村がピッチャーマウンドに立つ。
投げる鬼村。
大きくバットを振り切る山久。

鬼村

走れ！

山久は走る。

一塁、二塁、三塁、そして滑り込んでホームへ。
ホームに伏せたまま、山久は動かない。
鬼村はそれをピッチャーマウンドから見守っている。

山久
鬼村
山久
鬼村

うわああああああ
……。
うわああああああああああああ！
……。

泣いているのかなにかに怒っているのかわからない山久の音が響く。

鬼村
山久
鬼村
山久
鬼村
山久
鬼村
山久

……。
うう……。
……。
……。
見事なホームランやった。
……。
……。
立て。
……。

山久は立ち上がる。

鬼村
山久
鬼村
山久
鬼村
山久
鬼村
山久
鬼村
山久

わあああああああああああ！
（驚く）
わあああああああああああ！
……。
お前も声出せ。
……。
わあああああああああああ！
わあああああああああああ！
うわあああああああああああ！

山久 わああああああああああああああああああ！
鬼村 もつとや！
山久 わああああああああああああああああああああ！
鬼村 神宮球場————！！
山久 ……。
鬼村 なん見よんか。言え。
山久 ……。
鬼村 好きなこと言え。
山久 ……はい。
鬼村 全国大会出たかった————！！
山久 もつと野球したかった——！！
鬼村 結婚したかった——！！
山久 角田の、……え、
鬼村 なんか。
山久 いや、
鬼村 なんか、いややないやろ、なんか、
山久 いや、……したかったとすね。
鬼村 そらしたかったよ！
山久 そうやったんですね。
鬼村 なんか、お前はしたくないとか、
山久 いや、そらしたくないわけやないですけど、

山久

八幡に黒獅子旗を—————！

鬼村

持って帰れたかった—————！

山久

持って、……帰ってきてくれますよ。

鬼村

……どうやろか、

山久

……。

鬼村

いけるやろか。

山久

……いけますよ。

鬼村

優勝、するやろか。

山久

……。

鬼村

俺たちおらんのだ。

山久

……。

鬼村

監督もおらんのだ。

山久

……。

鬼村

このままやったら、もしかしたら、角田も、森岡も、勝俣とか塩屋とか、

山久

あいつらまでおらんくなるかもしれん。

鬼村

……。

山久

あと4、5日やと思つとつたのに、

鬼村

……。

山久

まだ4、5日もあるな。

鬼村

そうですね。

山久

どうするんやろか。

山久

後藤さんとか、来てくれんですかね。

鬼村

ああ、……あのひとが代わりに監督で来てくれたら、いいやろな。

山久

角田の球受けるのは、多部に任せてきました。

鬼村

そうか。

山久

はい。

鬼村

……それやったら、まあ、優勝、するやろ。

山久

……。

鬼村

俺たちおらんでも、

山久

……。

鬼村

あいつらやったら、きっと、優勝してくれるやろ。

山久

……。

鬼村

俺たちの分まで、戦ってくれるやろ。

山久

そうですね。

鬼村

いや、

山久

？

鬼村

俺たちがおらんでも優勝したら、それはそれで複雑やな。

山久

そんな。

鬼村

いい線行くけど優勝まではせんでくれー！

山久

そんな。

鬼村

冗談よ。

山久

……。

鬼村 優勝してくれ。

山久 ……。

鬼村 俺たちの分まで、戦ってくれ。

山久 ……。

鬼村 俺たちは、……国のために戦うけ。

山久 ……はい。

鬼村 みんなが安心して野球できるような、そういう世の中にするけ。

山久 ……はい。

鬼村 山久。

山久 はい。

鬼村 最後に、ちよつとキャッチボール付き合ってくれ。

山久 はい。

ふたりはキャッチボールを始める。

5回ほど投げ合った後、山久がボールを投げ返そうとするのを、鬼村が制してキャッチボールは終わる。

ありがとう。

鬼村
山久

……。

そのまま、鬼村去る。

小さくなつていく鬼村の背中を見送りながら、

山久
ありがとうございました！

鬼村が見えなくなる。

山久
ありがとうございました！

鬼村はもういない。

山久
ありがとうございました！

山久以外誰もいないグラウンド。

山久
またいつか、いつしよに野球やりましょう！

その声はもう鬼村には届いていないかもしれない。

山久
わあああああああああああああああ！

山久、走り出す。

山久

わあああああああああああああああああああ！

その姿は、戦争で敵に突っ込んでいく兵士のようにも見える。
暗転。

初めてパーティー券(1,500円、今でいう
5,000円前後)を買わされた日の話 作 穴迫信一

【登場人物】

田口タカト サラリーマン 27歳

トシ サラリーマン 27歳

イサオ サラリーマン 27歳

フサエ 田口の妻 31歳

女性(声)

小倉記念病院 田口の妻であるフサエが入院している

フサエの病室 フサエとイサオ

イサオ よかったじゃない

フサエ うん、まだわかないんだけどね

イサオ でも、もうちよつと頑張ればね、つまり、その、可能性はあるわけだ

フサエ うん、まあ、そう、かな

イサオ あーそうかそうか、いやあ、そういうことか、嬉しいよ

フサエ うん、うん、ありがとう

イサオ いやいや、おめでとう

フサエ うん

イサオ 田口は、もう知ってるの？

フサエ あ、ううん、だから、そう、今日言うつもりなんだけど

イサオ ああ、あ、そっか、そっかそっか、じゃあ、なんか秘密っていうか、自分の口から、フサエさんの口から言った方がな

フサエ …うん

イサオ …

フサエ …

イサオ すーっ（息を吸う音）…いやあ、そうかそうか、いやこりやめでたい話だぞ、うん

イサオ、フサエのベッドにすつと腰をかける、早技だ

フサエ え

イサオ …りんご…食べる？

フサエ （笑って）うん！

イサオ あ、食べる食べる？切る切る、すぐ切るよー

フサエ イサオさん、ごめんね、イサオさんにばかり気使わせちゃって、うちのなんか果物なんて滅多に買ってきてくれたりとかしないんだから

イサオ

ああ、そうなの、いいよいいよ、俺は好きでそうしてるだけだし、田口も

フサエ

うん、そうかもしれない

イサオ、口だけ笑っているような表情

フサエ

でも、ありがと

イサオ

…いいって

フサエ

…でも

イサオ

…?

…ありがとうございます

イサオ

なんだよ、いいって、いいっていいって、本当に

二人、伏し目がちに笑っている

沈黙

イサオ、いてもたってもいられず目的なく歩き出す

窓が目に付き、窓を開けるために動き出したかのように見せる小細工

めいた動き

フサエ、見てない

イサオ、窓を開ける

窓の外、紫川の両端にうす汚いほったて小屋が見える

イサオ 寒くない？

フサエ うん、大丈夫

イサオ ちよつとあけてていい？

フサエ うん

イサオ なんか、暑くて

フサエ うん

イサオ (適当にしゃべっている)もう夏だなあ…

フサエ …二人、遅いね

イサオ あ、ああ、そうだよな、会社出るときは一緒だったんだぜ

フサエ はぐれたの？

イサオ いや、そういうわけじゃないんだけど、気づいたら二人ともいなくて

フサエ …そう

イサオ まあ、そのうち来るよ、だって大分気合入ってたからなあ、田口

フサエ え

イサオ 来るの久々なんでしょ、なんか二人きりで会うの恥ずかしいみたい、だから俺とかトシとか誘ってくれてさ、あ、あれだよ、単純に俺たちもフサエ

さんの事、心配ってのがあったからさ、ちよつど良かったんだけど

フサエ ちよつどよかった

イサオ うん、ん

フサエ …

イサオ　ん、あ、なんか言い方変だった？あ、ごめんね、気にしないで、ね

フサエ　ちようどいいことなんて、なんにもない人なんです

イサオ　え、なに、田口のこと

フサエ　そう

イサオ　え

フサエ　だから、そう

イサオ　え、なになに

フサエ　…りんご、剥いてよ

イサオ　…うん

イサオ、カバンから直に入っていたりんごを取り出し、ベッドの隣の
炊事場でりんごを洗う

イサオ　…(独り言のように)剥く？

フサエ、窓の外を見ている

ほったて小屋に派手な女が入りしている

フサエ　豚

イサオ　…(独り言のように)剥く？っていうか、切ればいいのか…

フサエ　豚、走るな…

イサオ …(独り言のように)丸かじりしたいのかな…

フサエ ここまで響くぞ、豚

イサオ あ、フサエさん、これ普通に切つていいんだよね…

フサエ、イサオの方を向く

とほぼ同時に田口、トシ、病室に入ってくる

田口、トシ、笑いを堪えている

田口、トシ はあー！

トシ 危ねえ、吹き出すとこだったよ

田口 本当だよ、お前のせいだからな

トシ なんで俺のせいなんだよ、誠意ある行動だったろ

田口 ところが

イサオ 田口

田口 おう、イサオ、もう着いてたの

トシ (イサオに)おう

田口 フサエ、体調どう？

フサエ …

トシ おう、フサエさん、お久しぶりです、体調良くなりました？

フサエ トシさん、久しぶり

トシ ねー、本当ですよ、本当いつぶりだろうね、なんかでも顔色すっごいよくなっ

た感じするよ

田口 おい、お前、なんでそんな親しげなんだよ

トシ 親しいからだよ

田口 嘘つけよ、会うの久々なんだろ

トシ そうだよ、あ、そうだフサエさん、僕今日いいもの買いましてね

田口 (笑いながら) バカ、やめろよ

トシ (笑いながら) なんだよ

田口 あとにとつとつけよ、そういう話は

トシ あ、確かにそうだな

田口、トシの頭を叩く

二人、笑う

明らかに騒々しい

イサオ (小声でフサエに) まあ、田口なりの照れ隠しだと思うんだ

フサエ (うなづく) :

田口 (イサオとフサエに) お楽しみにー

イサオ (頑張って楽しげに) なんだよ、何の話

田口 だから後でね、あ、窓閉めていい？

田口、窓に向かって歩きだす

フサエ だめ、空けといて

田口 なんて、寒くないの

フサエ 寒くない

田口 暑い

フサエ 暑くない、丁度いい

イサオ (皆には多分聞こえていないが)あ…

田口 …あ、そう

フサエ うん、そう

イサオ あ、そうだそうだ、フサエさん、りんごってこれ、普通に切っていいんだ

よね？

フサエ うん？

イサオ あ、だから剥かずに、普通に、こう切る…

田口 あれ、フサエ、りんご食べるの？

イサオ ん

田口 そのりんご、フサエが食べるの？

イサオ え、そうだけど

田口 フサエ、りんご嫌いじゃなかったっけ？

イサオ え

フサエ ううん、そんなことないよ

田口 うそ、あれ、イサオが買ってきてくれたの、それ

イサオ あ、うん、そうだけど、フサエさん、りんご嫌いだった？

フサエ ううん、そんなことないって

田口 えー、苦手だったじゃん

フサエ …だから、それは、すりおろしてるのがね、食感とかが嫌なだけ

田口 あ、そうだったけ

トシ 分かる、俺も嫌い、あの食べ方意味わかんないよな

フサエ (トシに) 本当

イサオ …(フサエに) 本当？

フサエ 本当本当、りんごは大丈夫だよ

イサオ …そっかそっか、あ、じゃあ、普通に切るよ

田口 …

フサエ うん、ありがと

イサオ、慣れない手つきでりんごを切り始める

田口、フサエに近づく

フサエ、意に介さず、無表情

トシ、椅子に座り足をブラブラ

田口

フサエごめんな

田口、フサエの頭を撫でる

イサオ、それを見る

トシ、窓の外を見ている

フサエ

何が

田口

あ、だから、なかなか来れなくて

イサオ、手が止まる

イサオ

あ、仕事忙しかったもんな、田口は特に

トシ

そうそうこいつ明け方まで残業してたときもあったし、許してやってくれ

よ、フサエさん

フサエ

うん

トシ

まあ、許せないときは許さなくていいと思うけど

田口

おい、なんだよそれ

トシ

だってそうだよ

田口

いや全然来れてなかったのは正直、本当申し訳ない、ごめんなさい

フサエ

うん、怒ったりなんかはね…してないんだけど…

田口

…ん、けど？

フサエ

…

田口

え

イサオ

あ、そうだそうだ、実はフサエさんから俺たちにいいニュースがあるんだってさ

トシ お、いいニュース、田口

田口 …うん、(気を取り直し)なに

イサオ フサエさん

フサエ うん

田口 お前はもう知ってんの

イサオ ん、え、なに

田口 だから、イサオはどんな内容か知ってんの

イサオ あ、いや、俺も今から聞くよ、さっきフサエさんからそうゆう話があるっ

てことを聞いただけで

トシ 今、なんかイサオだけずるい感じしたな、な、田口

イサオ お前らが来るの遅かったんだろ

トシ まあ、そうだけどさ

田口 で、どんなニュースなの

フサエ うん：今日先生から言われたんだけど、このまま調子が戻ればあと一週間で

退院できるって…

田口 本当に?…

トシ すごいじゃん!

イサオ いや、すごいよな!よかったなフサエさん、田口!

田口 そうか、そうかそうか、うわー、ちよつとまって一週間だろ、部屋片付く

かなあ、

フサエ もう散らかってるの

トシ ひどいよ今コイツんち
フサエ まあ、想像つくけどね
田口 あーよかった、無駄な買い物しなくて、トシに騙されるところだったよ
トシ なんだその言い方、俺は後悔してないぞ
田口 退院祝いはちゃんと贅沢言ってくれよ、八ヶ月も頑張ったんだから
フサエ ……そんなに経ってるんだね
田口 そうだよ、お前よく頑張ったよ、俺も正直しんどかった…
フサエ ……え
田口 本当はお前のそばにいたかったけど、やっぱり辛そうなお前を見るのに耐えられなかった、だからあんまり見舞いにも行けなくて…ごめん…
フサエ うん、いいよ
イサオ はは
田口 イサオもありがとう、代わりによく見舞いに来てくれてたみたいでさ
イサオ ああ、いいよいいよ、ちよつと俺りんご切るわ
田口 おうありがとう
フサエ イサオさん、ごめんなさい
イサオ いいっていいって
田口 だってそのりんごだって…
イサオ おっと、ちよつと切るのに集中したいから、二人で楽しんで
田口 おお、ありがとう
フサエ ……

イサオ 切り終わったら、混ぜてよ
田口 おうおう

田口、トシに目をやる

トシ、窓の方を見ている

田口 トシもありがとな、今日ついてきてくれてさ

トシ いいよ別に、たださっきのは、俺は後悔してねえからな

田口 聞いたよ

トシ …フサエさん、おめでとう

フサエ うん、まだ決まりじゃないんだけどね、このまま良くなれば

トシ 良くなるよ、何言ってるんだよ

田口 そうだよ、やめるよ、快復するに決まってるよ

フサエ うん、頑張る

トシ うんうん、頑張ろう、あとちよっと、フサエさん退院したらさ、みんな

田口 パーっとやろうよ、田口んちか、月世界で、な

田口 月世界はないだろ

田口、フサエ、微笑んでいる

イサオ、せつせとりんごを切っている

トシ、また窓へ向かう

田口 おい、トシ、お前さつきからさずつと外見てるけど、どうかしたの
トシ …いやさあ、ほったて小屋がね、ここから見えるのよ

田口 あ、ああ…

トシ でさ、太った女がいてね、そいつが道行く男みんなに声かけてんの、で、皆に断られててさ、なんかおもしろいな、と、思つて

田口 へえ…

トシ あれ、あのまま、ほったて小屋に引つ張つてつて、一発やるんだよ

田口 …そうなんだ

トシ 禁止法ができて、ああいうところに追いやられちまったんだよ、かわいそうだよねー、お姉ちゃん達も

田口 そうだな、可哀想というか、まあ、生きるために必死なんだから

フサエ トシさん、どいて

トシ え

フサエ 私もその太った女見たい、どいて

田口 え、なんで見たいの

フサエ なんとなく、あなたが今、生きるために必死つて言ったから、あたしに似てるかも、と、思つて

田口 …なんだよ、そういう意味で言ったんじゃないよ

フサエ トシさん、少しどいて

イサオ …よし、りんご、切れましたよー

田口 おう、イサオ、ありがとう
イサオ おう、ん
フサエ トシさん、そこ少し、どける？
トシ おう、どけるよ、どくどく
イサオ フサエさん、りんごー…
フサエ うん、後でいい、ありがとう

イサオ、りんごをいれた皿と包丁をもったまま、立ち尽くす
トシ、フサエの異変に戸惑いながらも窓の前の椅子からどく
田口、フサエの異変に戸惑い、一歩さがる
三人、並んだように立つ
フサエ、窓の外をゆっくり眺める

フサエ あ、あの人のことね、太った
トシ そうそう、あの、赤の…着物みたいな…
フサエ 今、こつちを向いた人…
トシ そうそう、今、向いたね、こつち
田口 あ
トシ え、どうしたの
田口 あ、いや、なんでも
イサオ あの人、なんかずっとこつち見てないか

トシ 気のせいだろ

フサエ あの豚

イサオ、トシ え？

(女性の声) おーい、フサエちゃん！こつち見えるー？また、お話ししましょうねー

イサオ、トシ え？

女、手を振っている

フサエ あ、ミホちゃん

田口 …(抜けた声で)はは…ミホちゃん…

フサエ、手を振り返す

田口、手を振り返す

イサオ …おい！

フサエ は？

田口 え

(女性の声) フサエちゃん、フサエちゃん、

女、まだ手を振っている

田口 やば

イサオ なにしてんだよ、お前

田口 思わず、ミホちゃんだったから

(女性の声) となりは誰ー？イサオちゃん？

イサオ、驚き

イサオ ちよつと！

田口 やばいやばいやばい

イサオ 違うよ、タカトちゃんだよー

(女性の声) あータカトちゃんかー、昨日ぶりー

田口 お前、ふざけんなよ

イサオ 俺、巻き添えじゃねえか

三人、一斉に慌て出す

フサエ、無表情

女、まだ手を振っている

(女性の声) 皆、お揃いで―

田口 あー、トシ窓！

トシ あ、おう

トシ、窓を閉める

田口、焦り、身を隠すため思わずしゃがむ

田口 ぐう…

イサオ (小声で) しゃがむなしゃがむな！もう無理だよ！

イサオ、田口に近づく

田口 (小声で) 危ない危ない危ない！包丁危ない！

イサオ (小声で) いいから立てよ！

田口 (小声で) 立てない立てない！お腹痛い！包丁危ないって！

イサオ (小声で) いいから謝れ！フサエさんにすぐ謝れ！

フサエ トシさん、そこ開けて

トシ いや、これ閉めたほうがいいんじゃないかな
フサエ 暑いので、開けて
トシ …はい

トシ、窓を開ける
女、まだいた

トシ ほら、まだ見てるよ
フサエ (窓に向かって) 豚ー！
トシ え！
フサエ 寒い、閉めて
トシ は、はい！

トシ、窓を閉める

フサエ トシさん、寒い
トシ 了解しました

トシ、窓を閉める
イサオ、包丁とりんご皿を持ったまま、立ち尽くす
田口、しゃがんでいる

痛い沈黙

イサオ

田口…

田口

(しゃがんだまま)ちがうんだ…

フサエ

…いいの、まず、イサオさん

イサオ

はい

フサエ

包丁を置いて

イサオ

あ、はい

イサオ、包丁を戻す

フサエ

で、りんごをちょうだい

イサオ

あ、はい

イサオ、フサエにりんごを渡す

フサエ、手づかみでそれを食べる

フサエがりんごを咀嚼する音がシャコシャコと響く

フサエ

…聞かないわ

田口

…え

フサエ

あの豚、声が大きいから、時々タカトちゃんって言うてるの聞こえてたの、タカトなんて名前珍しいし、あなただったらここよく通るだろうと思ったから、もしかしたらって

田口

…すみません、でした…

フサエ

いいの、今日は、帰って

田口

…

イサオ

おい、田口

田口

…でも

フサエ

帰ってよ

田口

たまたま一回だけ話したりしたことがあるだけなんだよ

フサエ

一回だけ？それ昨日の事？

田口

あ、えっと昨日もたまたま道であっただけで、小屋に入ったことは…ない

…

フサエ

名前も覚えられて手まで振ってくる仲なのに？

田口

…いや、そうなんだけど

イサオ

あれだよな、記憶力いい子でな

田口

うん、そう、そうなんだよ

フサエ

イサオさんも知ってるんだ、そうよね、名前しつかり知られてるわけだし

イサオ

それは、あれだよ、だから記憶力がすごくて

フサエ

よく知らないんでしょ

イサオ

…知らない

フサエ

じゃあ、なんで、

イサオ

そのー……見た目で

フサエ

へえ……

イサオ

いや、見た目とかまあ

田口

あの、本当にごめん、病院の下まで来てなんかお前に会う覚悟ができなくて帰ったりしたことが何度かあったんだ、その時に、なんか相談に乗ってもらったりとかして、

フサエ

あの豚に私の相談をしたの？

田口

すいませんでした、誰かに話聞いてもらいたかったんだよ、お前が本当に体調悪そうにしているとときは、やっぱり見舞いに行くのが怖くて、大きい病気じゃないとは知ってたけどさ、なんか、そういう不安を相談させてもらってたりは、する、ごめんなさい

フサエ

本当に、全く、意味がわかりません

田口

ごめん

フサエ

……ミホちゃん、豚だけどいい子なのよ

田口

……え

フサエ

あなたの事も言ってた、あなたが毎日下まで来て私には会いに来てくれなくて帰っていつちゅう事も教えてくれたの

田口

……そうなの？

フサエ

大声でね、私を元気づけてくれた、下から、四階のこの病室まで、すごいわよねエネルギー、ミホちゃん

田口 …ああ、そうだな

フサエ まあ、あなたがやった事まではしらないけど

田口 ……

フサエ 帰って

田口 …本当に、何にも…

フサエ 帰って

田口 誓います

フサエ 帰ってよ

イサオ おい、田口

田口 …ごめん

トシ …行こう

フサエ …

田口 …ごめんなさい

三人、フラフラで病室から出ようとする

フサエ あ、ちよつとまって

三人 …

三人、驚き、そろりと振り向く

フサエ トシさん、あの話は

トシ え

フサエ なんか、後で話すって言ってたでしょ

トシ あ、あの話

フサエ 面白いんですよ？気になってたの

トシ …え、今

フサエ 今、今、後で言ってたから、待ってたんだけど

トシ …え…うん

トシ、二人に目配せするが、どちらも目を合わせようとしな

三人、ほぼ並んでたっていたが、トシ、一歩前に出て

トシ

あのですね、うちの会社の前にいつも売り子さんがいるんですけども、何の売り子かと言いますと、あの月世界というキャバレーがありました…（田口とイサオに）あるよね…あるんですけど、まあ、そこでは、あの一、そこに、僕とか田口君とか、まあ、イサオもよく行くんです、それで、そのまあ、中で何をするのかというと、まあ基本はお酒をみんな飲みます、で、まあ、食べ物も一応あるんで、そこでご飯も済ませたりとかもしますし、たまに、月世界あの、ステージがあります、そこに、たまに、あの芸能人が来るんですよ、この前は森進一って人が来て、なんかこれから売り出す歌手らしくって、でそれを見てみんなワイワイお酒を飲むとこ

ろが月世界ですね、で、その売りが売ってるものは、その月世界、決して安いところじゃないんです、やっぱり食べて飲むわけだから、それがですね、食べ放題飲み放題になる、まあ割引チケットみたいなものがあるんですよ、僕らはそれをパーティー券と呼んでるんですけども、まあそのパーティー券を売ってるんですね、その売りは

トシ、唾を飲み込む

トシ

で、何が面白かったかかって言いますと、まあいつも通り、こう退社しまして田口と二人で話しながら帰っていますと、会社を出てすぐのところその売りがさんがいまして、で、僕、その人を売りがさんと気づかずに、ちよつとこう可愛らしい方でしたもので、声をかけてみたんです、一緒にお茶いきませんか、みたいな感じですね

フサエ

トシ

トシさん、結婚してるわよね
ええ、してます、そしたら、まあ、売りが子でして、逆にそのパーティー券を、まあ僕はまったくそういう後悔とかはしてないんですけど、まあ形で見れば、売りつけられちゃったみたいな事になってしまつて、で、田口くんは、その子を最初から売り子って気づいてたつて言うんです、つていう話です
ふーん…

フサエ

トシ

どうもすいませんでした
その月世界には、女の人もいるの？

トシ はい…女の人

フサエ お客さんを接待する人

トシ …ええ、はい、います…

フサエ ふうん、じゃあ、女の子と森進一がいるのね

トシ 森進一は普段はいないです

フサエ へえ、いくらするの

トシ …はい

フサエ パーティ券、いくらするの

トシ …まあ、でも、1500円

フサエ …少し笑っている

トシ (なんとなく三人を代表し)じゃあ、あの、失礼します…

三人、出ていった

フサエ、一人になり、ベッドから起き上がり、窓を開ける、太った女
がまだ見ている

フサエ ミホちゃん！退院したらあたしも娼婦になるわー！

(女の声) 今、お前、豚って言っただろー！

フサエ 絶対金の稼げる娼婦になつてみせるわー！

(女の声) 誰の事、ブタって言ってんだよー！謝れー！

フサエ ミホちゃん！ありがとー！

(女の声) 豚だどー！このやるー！

フサエ 何もしてないわよねー！

(女の声) 謝れー！謝れー！

フサエ …あと、一週間で退院なんだー！

(女の声) …おめでとー！謝れやー！

フサエ ありがとー！あたし頑張るよー！

(女の声) がんばれー！その前に謝らんかい！

フサエ、女の怒号が続く中、窓を閉める

ガラス越しにうっすら、まだ声が聞こえている

フサエ、ガラスに正拳突きのようにこぶしをガラスにあてる、親指を

立てグッドのサイン

潮風と芝居

作 塩津順子

【登場人物】

小田はるお（北九州大学3年生、演劇研究会所属） 21歳

桃川（北九州大学3年生、演劇研究会所属） 21歳

村上（北九州大学2年生、演劇研究会所属） 20歳

1957年。7月。

若松の海岸で、演劇研究会の部員・小田・村上が、発声練習をしている。

小田・村上 ア・エ・イ・ウ・エ・オ・ア・オ！

カ・ケ・キ・ク・ケ・コ・カ・コ！

サ・セ・シ・ス・セ・ソ・サツ

小田 村上！お前まだ出るやる！

村上 すんません。

小田 腹式ができとらんぞ。

村上 はい！

小田 そんなんじゃ客に届かねえよ。

村上 はい。
小田 ちよつと声出してみる。
村上 はい。

小田、村上の腹に手を置く。

村上 ア・エ・イ・ウ・エ・オ・ア・オ・
小田 んー、腹は動いとるんやけどなあ。なんか軽いよなあ、お前の声。
村上 先輩は響きますねー。
小田 まだまだよ。桃川の方が響くやん。
村上 桃川先輩遅いですね。
小田 あいつ忘れとるんやないか？
村上 ええーそれはないですよ。
小田 あいつ、あんまり人の話聞かんからな。
村上 ああ、分かります。
小田 昨日部室で1時に若松の海に来いって言ったんやけどな。
村上 先輩、昨日部室で麻雀してましたね。
小田 うわ、あいつ朝までやったんかな。
村上 ありえますね。
小田 困るなー。
小田 まあいい。俺たちだけでもやるぞ。

村上　　はい。

小田　　じゃあ、長音な。すって！吐いて！はい！

小田・村上　あーーーーー！。

遠くから、角帽を被った桃川が現れる。

発声練習をしている2人に驚く。

桃川　　なんだあれ。

小田も村上も桃川にまだ気がついてない。

桃川　　おーい、小田あ。

小田　　おお、やつと来たか。

桃川　　すまーん。

小田　　お前遅いぞ。

桃川　　いや、大道具つくつとったんよ。

小田　　ほんとかよ。

桃川　　ほんとほんと。西田が、パネルあと7枚追加とか言うけさあ。抜けるの大

変やったんよ。

小田　　でもお前、寝不足なんやないか。

桃川　　ちよつとな。

小田 部室に住みすぎや。

桃川 そうやな、最近部室で寝とるしな。

村上 体壊しますよ。

小田 村上、心配せんでいいよ。こいつは拾い食いしても腹壊さんかった。

桃川 おい、あれは袋あいてなかったけ、汚くないやろ。

村上 え、先輩、何食べたんですか。

桃川 いや、めちやくちや腹へって、金なかったときやけな。誤解すんなよ。

小田 でも、拾い食いしたやん。

桃川 いや、したけどさ、

村上 何食べたんですか。

桃川 せんべいよ。でも、むきだしやったら、さすがの俺も食べんよ。袋入りで、

ざらめのついたやつちやっただけ、俺、食べたんよ。

小田 汚ねえなあ。

桃川 あーもー、とりあえずさ、どうすんの。

小田 ん？

桃川 いや、ここで何するんだよ。俺、なにも聞いてないし。

小田 発声ちゃ。

桃川 は？発声？

小田 え、俺言ったやん。

桃川 うそお。

村上 ほんとですよ。先輩、遠くから聞こえませんでした？僕たちの発声。

桃川 いや、聞こえてたけど。暇つぶししてんのかなって。

小田 そんなわけねえだろ。

桃川 うわー・・俺帰ろかな。

小田 早いだろ。

桃川 だつて暑いし。無理。

小田 ちゃんと休憩はさむけ。

桃川 じゃあ、今休憩しよ。村上も疲れたよなあ。

村上 はい。

小田 桃川なんもしてないやん。

桃川 てか、なんで海なん。

小田 え？

桃川 発声って、大学でできるやんか。

小田 いや、海で叫ぶと、気持ちいいやん。

桃川 それだけ？

小田 おう、それに焼けてかっこよくなれるしな。

桃川 あー、くだらねえなあ。

村上 先輩、なんで帽子被ってるんですか。

桃川 え、いやあ、なんとなく。

小田 なんとなくなわけなかるう、モテたくてそんなん被ってから。

桃川 うるせえよ。小田が「明日は海に來い」って言うから、俺はてっきり女の子に声かけるんかと思つて、角帽準備したのに。

村上
小田
実は僕も持つてきました。
皆同じやな。

桃川
海で発声するとは思わなかった。

村上
あ、あその女の子たち！

桃川
え！どこどこ！？

村上
僕たち見てるんじゃないですか？

桃川
えっほんとか。

小田、角帽を取り出して被る。

桃川
お前も持つとるやん。

小田
いや、発声おわつたら、小倉行く予定やったけな。一応、な。

桃川
準備がいいなあ。

小田
お前らも持つてるくせに。

村上
僕も被ります。

3人、角帽を深く被って、遠くの女子を見つめる。

桃川
こっち来るかなあ。

小田
そうだ、ここで今、発声しよう！

桃川
え？なんで？

小田 ア！エ！イ！ウ！エ！オ！ア！オ！

村上 ・ ・ ・ あつ。

桃川 おい、小田、やめる。

村上 あー ・ ・ ・ 行っちゃった。

小田 行っちゃったな。

桃川 お前のせいだろ。

小田 いや、お前らも続かないからだろ。

桃川 なんで発声するんだよ。

小田 興味が沸くかと思つて。

桃川 バカ。

3人、帽子を脱ぐ。

桃川 あー！やっぱり気持ちいいな！スー スーする。

小田 お前一番被つとつたもんな。

桃川 あちい。

村上 先輩、僕の声、そんなに小さいですか。

小田 うん、小さいというか、なんか、響かんなあ。

村上 どうしたらいいんかなあ。

小田 まあ、今日一日、声だすと、変わるんやないか。

村上 声帯強くなりますか。

小田

たぶんな。

桃川

は？声帯？

小田

いや、こつちの話や。

桃川

それにしてもさ、発声するんなら、もつと人数集めようや。3人で恥ずかしいやん。

小田

今、皆大道具つくつとるやろ。

村上

大道具やってない時期にやればよかったやん。

小田

あー、もう発声するぞ！俺一人で発声するけ。

桃川

おう。

小田、海に向かって一人で発声している。

桃川

うわー、あそこにあとで混じるの嫌やなあ。

村上

・・・僕も、行ってきます。

桃川

なんだよ、村上休憩してけよ。

村上

僕が相談したんですよ、小田先輩に。

桃川

声のこと？

村上

はい。どうしたら声、もつと出ますかって。そしたら、小田先輩が

桃川

NHKの人に相談してくれたんです。

村上

え、NHKの人のアドバイスやったん。

村上

はい。海で発声したら、潮風にあたって喉が強くなるって。

桃川 ほんとなんか、それ。

村上 さあ……。

村上 発声したいと言ったのは僕ですけど、若松の海でやろうって僕を誘ってくれたのは小田先輩です。

桃川 そうか。

村上 はい。じゃあ、僕行つてきますんで。

村上、走り出す。

一人残される桃川。

小田 あーーーーー

村上 長音ですか。

小田 おう、村上、もういいのか。

村上 はい、頑張つて声帯太くします。

小田 そうか！じゃあ、俺が合図をとるからな。

村上 はい！

小田 吸つて！吐いて！

小田、手を叩く。

小田・村上 あーーーーー

桃川

あー

桃川も走りながら二人に近づく。

お花が好きなあの子

作 塩津順子

【登場人物】

岡山リエ（事務員） 30歳

田中さん（八幡製鉄所構内の守衛さん） 55歳

三井さん（八幡製鉄所構内の守衛さん） 51歳

1968年5月。

八幡製鉄所構内。

守衛2人が、守衛室にいる。

田中 眠くなるなあ。

三井 そうですなあ。空気が。

田中 空気が？

三井 あったかいでしょ。

田中 おお。俺、寝不足なんよ。

三井 なん夜更かししとるん。

田中 夜は長いけなあ。

三井 ゆっくり寝られるやろ。
田中 いろいろできるやん。
三井 いろいろってなんや。
田中 一杯やるとかな。
三井 昼間使いもんにならんくなったら仕方なからう。
田中 昼は昼、夜は夜や。
三井 そうですか。
田中 少し、仮眠とろうかねー。
三井 どうぞどうぞ。
田中 三井さん、今日外で食べると？
三井 弁当です。
田中 おう、丁度良かった。
三井 あの子がきたら、起こしましょうか。
田中 いや、たぶん起きちまうよ。
三井 岡山さんね、はは。
田中 この前なんか、あの子、でっかいカメラ持ったよ。
三井 おお、ほんとですか。
田中 うん、キャノンのカメラやって言っとった。
三井 何撮るん。
田中 そりゃ、やっぱりあれやろ。
三井 ここにそんな撮るもんあるかあ。

田中 宝の山やって言っとったよ。

三井 宝の山?・・・鉄鉱石?

田中 そりゃ俺たちや社員さんにとっては財産やけどな。

三井 わかった煙突か。この前、煙がもくもく出るのが好きって言いよったけ。な、
当たりか。

田中 違うちゃ。そんな大きいものやない。

三井 それならなんね。

田中 岡山さん、いつもあつちの遠くまで行くやろ。

三井 鉱石山のほうか?

田中 そうそう。

三井 あつちになんかあるかね。

田中 お花よ。

三井 え?

田中 花。岡山さん、植物好きやん。

三井 おお。おお、そうか。

田中 花撮って、アルバムに入れて眺めとるらしいぞ。

三井 へえ、少女やね。

田中 まあ少女って歳やないけどな。

三井 え、あの子何歳やつけ?

田中 28・・・いや、30って言っとった。

三井 えっそうなん。

田中

そうよ。

三井

嘘やろ。

田中

嘘やない。ちゃんと聞いた。

三井

はつきり聞いたんか。

田中

おう。30って言っとった。

三井

失礼やろ。

田中

いいやろ減るもんやないし。

三井

言いたくないやろ。20の娘ならまだしも。

田中

もうちよつと化粧とかしたらいいのになあ。

三井

化粧ねえ。

田中

口紅もひいてないしな。

三井

でも濃い化粧は俺、好かんけどな。

田中

あの、事務の弥生ちゃんとかいいやん。

三井

山下さん？

田中

そーそー。髪とかさらーつとしとって、なんか歩いたらふわーつといい匂

三井

いするやろ。

田中

田中さん、そんな目で見とるんか。

三井

弥生ちゃんが岡山さんくらい、ここ来たらしいのに。

田中

だれでも変わらんわ。

田中

変わらんことないやろ。

そこへ、岡山がやってくる。
ショートヘアで、あまり化粧気のない風貌。
首から本格的なカメラを提げている。

岡山
こんにちはー

三井
おう、岡山さん。

岡山
あーどうもどうも。

田中
ほらみろ。

岡山
え？

三井
おお、カメラや。

岡山
なんですかー。

田中
さつき、こいつと話とったんよ、岡山さんのこと。

岡山
え、私のこと？

三井
そうそう。ほんとごっついカメラやなあ。いくらしたん。

岡山
4000円くらいですけど。

三井
たっかいなあ。

田中
給料ぶっこんだんか。

岡山
そんなわけないですよ。ちゃんとかツコツ貯めて、買ったんですよ。

田中
4000円あったら、俺、飲みにつかうか、パチンコに使うな。

三井
競輪もやろ。

田中
お、俺はもう最近しとらん。

三井 おお、この前大穴当てたけ、もうせんのですか。
田中 いやいや当てとらんって。

三井 嘘言わんでいいて。岡山さん、田中さんな、今ならなんでも買ってくれるよ。
岡山 まあ、そんなに景気がいいんですか。

田中 よくないよくない。

三井 なんか、欲しいものないん、岡山さん。

岡山 欲しいもの？そんな急には思いつきませんねえ。

三井 綺麗な指輪が欲しいわーとか思わんの？

岡山 指輪ねー。

田中 あんた、指輪くれるような人はおらんの？

岡山 えっ。

三井 田中さん、なん聞いとるん？

田中 いいやんか。岡山さん、どうなんね。

岡山 今はいませんよ。

田中 「今は」？前はおったん？

岡山 秘密です。

田中 はは、岡山さん、見栄はらんでいいちゃ。

岡山 見栄じゃないですよ。

田中 ああ、そうだ、俺の息子でも紹介しちやろうか。

岡山 えっ息子さん？

三井 あんた、息子もおったと？

田中 いや、娘しかおらんけど。

岡山 えー。

三井 あんた、ほんといい加減やな。

田中 岡山さん、今期待したやろ。な。

岡山 全然してまっせん。

田中 ほんとかいな。

岡山 じゃあ、私行きますね。

三井 あ、これ書いて。

岡山 はい。

三井、岡山に利用時間を記入するための紙を渡す。

岡山、記入する。その岡山を見る田中。

田中 岡山さんは髪長くせんのか。

岡山 なんですか急に。

田中 テレビのほら、吉永小百合さんとか、いいやん。

岡山 誰？

三井 え、岡山さん、吉永小百合も知らんの。

岡山 テレビとかあんまり見らんもん。

田中 映画にもよく出とるやん。

岡山 映画ねえ。

田中 いかん。そこからいかんよ岡山さん。
 岡山 なんなん。
 田中 いろんな女のひとを研究せな。
 三井 あんたは研究しすぎや。
 岡山 お母さんみたいなこと言わんでよ。
 田中 せっかく女性として生まれたんやけ、きれいな格好せな。
 岡山 制服やけオシヤレせんていいもん。
 田中 なんか、工夫あるやろ。髪ふわっふわにさせるとか、スカートをこう、短
 ーくするとか。
 田中 さんやらしいー。
 三井 岡山さん、あんまこの人と話さん方がいいよ。
 岡山 はい。
 三井 岡山さん、どの辺撮るの。
 岡山 あの辺。
 三井 柵の近く？
 岡山 はい。
 三井 気をつけりよ。あの辺、雨でぬかるんどるけ。
 岡山 はい、ありがとうございます。まーす。
 三井 はい、いってらっしゃーい。
 岡山 はーい。

岡山、去る。
軽い足取り。

田中　そうかそうか。

三井　どうしたん。

田中　岡山さんは、あれやね。テレビを見な。

三井　珍しいよな、あんなテレビ見らん子なんて。

田中　お花眺めとる場合やないぞ。

三井　いいやん、お花見とつても。

田中　いやーあれじゃいかんよ。休日が浮かぶわ。

三井　は？

田中　デートにも行かず、着飾りもせず、シャツとズボンで、お花の側に座って、

話しかけて一日が終わるんや。

三井　そうなんか。

田中　想像や。

三井　ふふ、でもありそうやなあ。

田中　やる。でなけりゃ、カメラ持って、お花畑に行くんや。

三井　おお・・・似合う。

田中　お似合いやな。

三井　素朴な子やもんな。

岡山が、随分遠くに行っている。

あーあーあんな遠くまで行ってから。

ありゃほとんど探検家ですな。

はは。

今日も一杯やるんですか？

ん？

(飲む動作をする)

ああ、どうかねえ。

絶対飲むやろ。

まあ。まあ。

せめて週3くらいにしなさいよ。

そりゃ少なすぎるわ。週6やろ。

あんたはどうしようもないな。

今日はいい夜になりそうやな。

そうですか。

いい風がふいとる。

田中さんにもいい風が吹いてますよね。

なんの話か。

この前、当てたでしょう。

またそれか。

田中

三井

田中

三井 隠さんでいいですよ。

田中 隠すも何も。最近は見るとばかりや。実際にはかけとらん。

三井 ほんとですか。

田中 ほんとよほんと。あんた、俺の給料と、こずかい知つとるやろ。もう、賭けきらんごととなつてきた。

三井 ほう。

田中 かみさんも怖いしな。

三井 そうかい。

田中 娘も、競輪どころか酒も取り上げようとしとる。

三井 心配しとるんよ、きつと。

田中 好きにさせてくれよなあ。

三井 娘さんはいくつ？

田中 28や。

三井 ほう、結婚は？

田中 しとるよ。

三井 そうですか。

田中 あんたんとこも大きかったよな。

三井 ああ、うちは息子も娘もおりますよ。どっちももう結婚しとるよ。子どももおりますし。

田中 おお、そうやったね。

三井 孫がまたね、かわいいんよ。障子にいつぱい穴開けたりするんやけどな。

田中

はは、やんちゃやね。

二人とも、なんとなく岡山を見る。

岡山は、ひよろひよろした植物を、カメラのレンズを伸ばして、
一心不乱に撮っている。

田中

・・・撮りまくつとるなあ。

三井

レンズ、めちやくちや伸びてますね。

田中

あんなごついカメラ、若い女の子は持つとらんよな・・・。

三井

でも、最近どこかで見た気がするんですよ、ああいうカメラ。

田中

あー・・・所長さんやない？この前花見の時に持ってきとったやん、でかい

カメラ。

三井

あーっそうそう。所長さんは写真好きやけね。

田中

やっぱり、若い子はカメラに金使わんよな。

三井

ま、人それぞれでしょ。

田中

さつき、もつと聞いとくんやったな。

三井

え？なにを？

田中

指輪をくれる人はおるやろうか。いや、おったんやろうか。

三井

でも、あんまり言いたくなさそうやったし。

田中

恋をしたことあるんやろうか。

三井

・・・田中さん、なんでそんな気にするん。

田中 いや・・・どうしてやろうな。

三井 もしかしたら、これから大恋愛でもするかもしれませんよ。

田中 そうやろうか。

三井 そうよ。ほら、事務の女の子みたいに、髪に香水ふりまく時が、くるやろ。

田中 ははは、そうか、そうだよな。

三井 まあ、びつくりしますけどね。

田中 そうなったら、また根掘り葉掘り聞いちゃろ。

そこへ、岡山さんが走って守衛のもとへやってくる。

岡山、息もきれぎれ。

田中 なんねなんね。

岡山 田中さん、

田中 おうどうしたどうした。

岡山 あの、ここの草って摘んでいいんですかね。

田中 草？

岡山 すごい、珍しい草が、あつて、

田中 なにっ。

岡山 ほんと、私、初めて見たんです。

田中 どんな見た目なん。

岡山 ひよろつと長くて、稲みたいなんですけど、でも稲ほどはワサワサしてな
くつて、その、穂が、穂が全然見たことないんです。
田中 んん？よくわからん。
岡山 なんていうのかな、ああ、うまく言えん。
田中 あー見たほうが早いな、それは。
岡山 はい。
田中 なに、毒でもありそうなやつか。
岡山 そんな、きのこじゃないんだから。
三井 危険なやつか？
岡山 いや、全然危険とかそんなのじゃないんですけど・・・。
田中 なら、摘んできていいよ。
岡山 ほんとですか！
三井 え、いいん？
田中 草1本とっても、だーれも責めんやろ。摘んだら俺にも見せてな。
岡山 はい！ありがとうございます！
三井 もう、写真は撮ったん？
岡山 はい、それはもう、何枚も撮りました。
三井 そうかそうか。よかったね。
岡山 はい。では、いつてきます！

岡山、嬉しそうに、草のもとへ走り去る。

田中

なんで、あんなに楽しそうなんやろうな。

二人、走り去る岡山を見つめる。

林帆の海へ洞海湾にて

作 鴉飼秋子

【登場人物】

靖男

小学校5年生

老人

昭和二十五年、若松港

靖男がひとりで岸壁を歩いている。

立ち止り、平均台を歩いているような慎重な足取りで細い板の上を歩く。
靖男は、船にぴよんと跳び移る。

少し歩き、ぴよん。歩き、ぴよん。歩き、ぴよん。を繰り返す。

靖男

．．．。

歩き、ぴよん。

靖男

．．イクちゃん。

次第に大きくなる声。
歩き、びよん。

靖男
イクちゃん。あ。

靖男、旗を見つける。

靖男
．．．。

靖男、別の旗を見つけて。
歩き、びよん。

靖男
イクちゃん。

老人の声
こら！

船の中から声がする。
驚き立ち止る。

靖男
．．．。

老人の声
なんしとるんか。こげなところに来て危なからうが。

靖男 あのことばく。

老人の声 岡の子供やないか。

靖男 あのこと。

老人の声 死ぬぞ。

靖男 え。

老人の声 お前、死ぬぞ。

靖男 。

老人の声 こげん岸から離れたところで、海に落ちたらあがれんぞ。大きな船やら通つ

てみる、スクリユ一の渦に巻き込まれる。

靖男 。

老人の声 この湾にどれだけの子供が沈んだか知らんやろうが。

靖男 。

声の主である老人が出てくる。

老人 もう戻れ。絶対に落ちるな、慎重に戻れ。

靖男 あの。

老人 なんか。

靖男 この船の方ですか。

老人 ああ。

靖男 僕、船を探していて。

老人

船ならここいらにたくさん浮かんどる。

靖男

その、友達の船を。

老人

船の名前は。

靖男

船の？わかりません。

老人

なら、わからん。

靖男

イクロウっていう子の家なんです。

老人

人の名前は、もつとわからん。

靖男

・・・。

老人

ここじゃ名前は誰も知らん。名字やらもつと知らん。船の名前が全てや。

靖男

・・・わかりません。

老人

なら、もう帰れ。

靖男

あの、あの辺の岸に止まっていたと思うんです。帆があつてエンジンがあつ

老人

て、あとお風呂もある。

靖男

それと同じ船がここには何千隻もある。

老人

え。

靖男

ほれ、この船だつてそれとよく似とるやろう。どこが違うか言うてみい。

老人

・・・。

靖男

この湾に止まっている何千という船の何千という帆のカタチ何千という船

老人

べりの色、見分けがつくんか。

靖男

わかりません。でも、本当にあの辺に止まっています。

老人

でも今日は違う。

靖男
はい。

老人 今日も船が止まっていると思うやろう、明日は全部違う船や。あそこにお
る船は、明日は八幡港におるかもしれんし、門司港におるかもしれん。あ
の船は尾道から。あの船は天草から。あの船は今治から。あの船は淡路か
ら来た。みんな、たまたま今日、若松におるだけのことや。船のかたまり
はな、生きとる村や。

靖男 どうやって探せばいいんですか。

老人 船を覚えるか船の名前を覚えるか。

靖男 イクちゃんの家です。

老人 お前の家はどこにある。

靖男 白山です。ここからすぐ近く。あそこに見えるでしょ。あの通りを右に曲
がって、左にまがって。

老人 船はそんな風には説明できん。

靖男 ・・・。

老人 学校はどこか。

靖男 若松小学校。

老人 そいつは学校には来とらんのか。

靖男 今は夏休みだから。

老人 児童ホームは。

靖男 ・・はい。

老人 児童ホーム知つとるか。

靖男 船に住んでいる子たちが、寝泊まりしているところ。

老人 知つとるやないか。そこで会え。

靖男 でも、あそこは、イクちゃんがつまらないって。

老人 ここよりは確実に会える。

靖男 でも、夏休みだから船に戻っているだろうし。

老人 船では会えん。

靖男 でも、児童ホームは、なんだかうまく話せない気がするんです。

老人 船は無理や。

靖男 でも、僕、あんなにイクちゃんが喋ったの初めてみたから。

老人 ・・・。

靖男 船で会わないとうまく喋れない。

老人 海で会うにはよほど幸運でないと会えん。

靖男 どうしたら幸運になれますか。

老人 見分けるものは。

靖男 見分ける？

老人 船の名前もわからん、船の様子もわからんじゃ探し様がない。

靖男 あ、旗。

老人 ・・・。

靖男 旗です。イクちゃんの船にはきつと赤い旗があります。

老人 赤い旗はどの船にもある。

靖男 はい・・。

老人は、船の中から濡れた洗濯物を持ってきて、船に渡したロープに干し始める。

靖男

老人

靖男

黙って干し続ける老人。

靖男

老人

靖男

老人

靖男は、老人が洗濯物を干す様子をじつと見る。

僕の家ではお母さんが干す。

老人

靖男

老人

靖男、老人を見続ける。

老人
靖男

帰れ。

・
・
・

靖男は船から出ようと、岸を見渡す。

帰り道を考えて、甲板で少しウロウロするが、やめて元の位置に戻る。

靖男

あの。

・
・
・

老人

他に家族は。

靖男

・
・
・

老人

お仕事は。

靖男

・
・
・

老人

船で、石炭を運ぶんですか？

靖男

・
・
・

老人は、まだ干さずにいる洗濯物を残したまま、船の中に戻る。

靖男は、また、岸を見渡し、船に渡した板を渡ってみるが、途中で引き返す。

老人が、洗濯はさみを持って帰ってくる。
老人は、歩き方が不自由である。

老人 はよ、帰らんか。

靖男 できない。

老人 あ？

靖男 帰れない。

老人 なんで。

靖男 どうやって来たのかわかんない。

老人

靖男

老人は、黙って洗濯物を干し始める。
靖男は、老人が手助けしてくれないので、諦めてその辺に座る。

靖男 あの。聞いて欲しいんです。

老人

靖男 僕は、水晶のことを考えているんです。

老人

靖男 僕の大切にしてきた水晶があるんですけど。

老人

靖男　イクちゃんが、海に放つたんです。それで、僕はイクちゃんと喧嘩になって。
老人　・・・。
靖男　それから会っていない。
老人　・・・。
老人　・・・僕の話、聞いてくれますか。
老人　・・・。
靖男　あの！
老人　はよ、帰れ。
老人　だから、帰れないんです。
老人　なら、どっか行け。
老人　行けないんです！
老人　・・・。
老人　だつてどうしてこんな遠くまで来ちゃったのかわからないんだから。
老人　・・・。
老人　これより、遠くに行っちゃって、家に帰れなくなったらどうしたらいいんです。
老人　・・・。
老人　あなたのせいです！

靖男は膝を抱えて顔をうずめる。
老人は、洗濯物を干し続ける。

靖男

・ ・ ・もう、家に帰りたい。

二人は、それぞれにしばらく黙っている。

老人

風がない。

靖男

・ ・ ・。

老人

乾かん。

靖男

・ ・ ・。

老人

・ ・ ・。

靖男

・ ・ ・。

老人

どうするんや。

靖男

・ ・ ・。

老人

・ ・ ・。

靖男

・ ・ ・。

老人

会えもせん、帰れもせんどうするんや。

靖男

・ ・ ・わかりません。

老人

・ ・ ・。

靖男

仲直りしたいかな、喧嘩したいかな。

老人

・ ・ ・。

靖男

イクちゃん、何考えてるんだらう。

靖男

イクちゃん、何考えてるんだらう。

老人

なんもわからんで、なんでこんなとこに来たんや。

靖男

イクちゃんの船を探してて気が付いたら。

老人

どんなこと話したんや。

靖男

イクちゃんは船にあるいろんなものを見せてくれました。炊事場やお風呂

老人

やエンジンや。だから、僕も水晶を見せた。

老人

・・・。

靖男

水晶は、高塔山で採るんだ。あの山。(指さす)。友達と探しにいつて競争

老人

して。誰のが一等、透明かって。あれは、僕が持っている中でも本当に綺

老人

麗なものを持っていったんだ。でも・・捨てられちゃった。

老人

・・・。

靖男

海のどこかに沈んでるんだ。

老人

他になんかせんやったんか。

靖男

なんかって。

老人

捨てる以外に。

靖男

くれました。うどんを、僕に。

老人

なら、いいやないか。

靖男

でも、僕は、いらないうって言った。

老人

なんで。

靖男

だって、うどんを、おうちから盗んだお金で買っていたから。

老人

・・・。

靖男

それでも、無理やり僕に食べさせようとした。

老人

そんで。

靖男

僕はうどんよりも船が欲しいって言った。

老人

そんで。

靖男

喧嘩になった。

老人

そんで。

靖男

僕は、イクちゃんがわからなかった。

老人

・・・。

靖男

なんであんなことするんだろう。

老人

・・・。

靖男

学校のあと、児童ホームに、行ってみようかとも思ったけど。

老人

・・・。

靖男

やめた。ホームは母ちゃんがない、って話した時のイクちゃんの顔を思い出したら、そういうイクちゃんを見るのはいけないと思った。

老人

会いたいんか会いたくないんか、よお、わからんなあ。

靖男

・・・。

二人、黙る。

靖男

どこから来たんですか。

老人

さあ。海。

靖男

それはわかります。

老人

この前は、長崎の近くにおった。

靖男

若松に来て、どれくらい経つんですか。

老人

わからん。

靖男

船の子って、みんなすぐに居なくなっちゃうんだ。たまに学校に入ってくるんだけど、みんな何カ月か経ったら居なくなっちゃう。

老人

ああ。

靖男

前にね、学校帰りに児童ホームに行ったことあるんです。僕よりお兄さんやお姉さんもいたし、僕よりうんとちいさい子もいた。

老人

中学生までは預かるんやったかなあ。

靖男

はい。僕は兄弟がいないから、そういうところで寝泊まりするのって楽しいだろうなって言ったんだけど、イクちゃんはつまんない、って。

老人

・・・。

靖男

部屋にね、みんなのコオリが一つ一つおいてあって、イクちゃんの着物やなんか全部その中に入れてあるんです。僕、イクちゃんが自分で着物を畳んで、その中に詰めてるのを見てたら、イクちゃんがすごく寂しそうに思えて、なんだか僕、悪いこと言ったな、って。

老人

船には戻れん、船は毎日仕事に出とる。

靖男

・・・。

老人

学校には行かんといかんからな。

靖男

イクちゃんは、学校が休みのときだけ家に戻るんだって。

老人

なら、今は船に戻つとるんかもしれんなあ。

靖男

老人

どこかの港に行っちゃたのかな。

この辺やったら、八幡か門司か。

すぐにまた帰ってきますよね。

けど、新しく仕事が入るかわからんからなあ、そうなったら、九州に限らんと、どこへでも行くやろ。四国でも関西でも。どうかしたら遠くの外国にだって行くかもわからん。

え。

船っちゅうんはな、生きとる間は留まらん。ずっと動いとるんや。

イクちゃんの船、どこかに行っちゃったの？

行ったかもしれんなあ。

．．．行きましょう。

．．．。

お願いします！この船、出してください！

は？

八幡港か門司港。まずは近い港に。

なん言いよんか。

早くしないと、イクちゃん、どこか遠くに行っちゃう。早く探しに行かな

いと。

．．．。

僕、イクちゃんにもう一度会わないといけないんです。

この船は動かん。

靖男
え？

老人
この船はハシケや。動力を持たん。

靖男
．．．。

老人
エンジンがないんや、浮かんどるだけ。

靖男
．．なにそれ。

老人
．．．。

靖男
なにそれ、船なの。

老人
うるさい。

靖男
そんなの船じゃない。

老人
そうや船やない。自分で動けんのがから。エンジン積んだ船に引っ張って
もらうのを待つしかない、能無しや。

靖男
．．八幡には行けない。

老人
そうや。

靖男
．．門司にも行けない。

老人
別の船に乗せてもらえ。

靖男
．．．。

靖男は、その場で茫然とする。

老人は、ふたたび洗濯物を干し始める。

老人

おい。

靖男は、老人の声をまったく聞かずに、やみくもに遠ざかっていく。

老人

おい、走るな、海に落ちるぞ。

遠ざかっていく靖男。

老人

おい・・・あっ！

沈黙。

老人は、体を動かさずそのまま海を見ている。

しばらく動かない。

靖男

・・・危なかった。

老人

・・・。

靖男

落ちるところだった。

老人

言わんこっちゃない。

靖男

足が、グネってなった。

老人

死ぬところやったな。

靖男

はい。

老人

・・・。

靖男
駄目だ。

老人
・・・。

靖男
僕、無理だ。

老人
・・・。

靖男
僕、駄目だ。

老人
なんするつもりやったんか。

靖男
船も探せない、イクちゃんも探せない。

老人
あんなに、急いだから、探せるもんも探せんわ。

靖男、膝を抱えて、顔をうずめる。

大きな船が、近くを通って行く音。

老人
だいたい、探して何をするつもりやったんや。

靖男
・・会う。

老人
だから、会って何をするつもりやったんや。

靖男
・・・。

老人
お前、友達が沢山おるんやろうなあ。

靖男
・・・。

老人
山で水晶とって、竹で鉄砲作って遊んで。そんなことするんやろうなあ。

靖男
・・・。

老人
祭りは行かんのか。

靖男

祭り？白山神社のお祭り？

老人

知らんけど。たまに岡の方から笛の音が聞こえてくるわ。

靖男

もうすぐなんです。

老人

ふん。

靖男

お母さんが法被を用意してくれて、友達とお神輿を引っ張る。

老人

お前、喧嘩したことあるんか。

靖男

喧嘩？友達と？

老人

．．．。

靖男

．．ない。

老人

．．．。

靖男

．．初めてした。

老人

昔なあ、お前くらいの子供がおった。

靖男

．．．。

老人

小さいけどなあ、よく働いた。そいつが洗濯もしたし炊事もした。

靖男

この船に？

老人

けど、友達はおらんやった。

靖男

．．．。

老人

船におつたらなあ、同じくらいの子供にはそう会えん。

靖男

．．．。

老人

会っても、仲良くなる前には別れる。

靖男

．．．。

老人
靖男
老人

そいつは、良かったなあ。

・
・
・。

お前と喧嘩したんやから。

老人は、洗濯物を全て欲し終わる。
山のももとから、かすかに笛の音が聞こえてくる。

老人

帰らんか。

・
・
・。

老人

もう帰れるやろが。

靖男

・
・
・はい。

老人

・
・
・。

靖男

僕、イクちゃんにまた会えますか。

老人

・
・
・。

靖男

僕、必ず船を見つめます。

老人

知らん。

靖男

旗を覚えてるから見つけられる。毎日、海を見ます。

老人

風のある時にしろ。

靖男

・
・
・。

老人

今日は海が凧いどる。

靖男

はい。

老人

風が吹けば、岡でも旗はよく見える。

靖男

・ ・ ・ また会えますか。

老人

・ ・ ・

靖男

僕、イクちゃんを見つけたら、あなたの船を引っ張ってくれるよう頼んでみます。そうすれば、一緒に他の港や外国や、好きなどころに行けます。

老人

いらん世話や。

靖男

・ ・ ・

老人

お前、この船の名前も知らんやろうが。

靖男

・ ・ ・

老人

いいか。約束はしない。

靖男

・ ・ ・

老人

ここは岡の子供が遊ぶ場所やない。

靖男

・ ・ ・ はい。

遠く、船のエンジン音も聞こえる。

老人

行け。

靖男

はい ・ ・ ・ ありがとう。

老人

振り返るな。ひたすら山を見て辿りつくことだけを考えろ。

靖男

はい。

老人

・ ・ ・

老人 靖男

さよなら。
・
・
・。

靖男は、歩いて、ぴよんと飛び越えた

【平成25年度 公演情報】

北九州市制50周年記念事業

北九州芸術劇場＋市民共同創作劇

「Re:北九州の記憶」

日程：平成25年12月21日（土）・22日（日）・23日（月・祝） 14時 会場：北九州芸術劇場 小劇場

【構成・演出】 内藤裕敬（南河内万歳一座）

【作】 穴迫信一（ブルーエゴナク）、鵜飼秋子（さかな公団）、塩津順子（のこされ劇場≡）、

寺田剛史（Hock）、藤本瑞樹（二番目の庭）

【インタビュ協力】 有馬多賀子さん、石川博司さん、内山昌子さん、岡山リエさん、小川巖さん、小田晏雄さん、

神谷義幸さん、田中靖朗さん、古川峯子さん、松尾樹明さん

【出演】 穴迫信一、阿比留文智（飛ぶ劇場）、鵜飼秋子、内山ナオミ（飛ぶ劇場）、小田晏雄、

加賀田浩二、高野由紀子（演劇関係いすと校舎）、寺田剛史（飛ぶ劇場）、橋本隆佑（超
人気族）、松尾樹明、宮村耳々、門司智美、リン（超人気族）、藤田辰也（南河内万歳一座）

「スタッフ」

美術…権藤智海* 照明…遠藤浩司* 音響…杉山聡* 衣裳…内山ナオミ（工房MOMO）
演出部…小笠原敬子 平林拓也 照明操作…本城理恵* 岩田守* 舞台監督…谷川哲朗*
宣伝美術…トミタユキコ（ecADHOC）
広報…鬼木身和* 票券…中村智子*
制作…吉松寛子* 村松薫* 藤本端樹（合同会社Kitaya505）
劇場支配人…久末隆彦*
プロデューサー・館長…津村卓*（*北九州芸術劇場スタッフ）
アドバイザー…井生定巳（北九州文化連盟会長、劇団青春座 代表）

主催…（公財）北九州市芸術文化振興財団 共催…北九州市 助成…財団法人地域創造
企画・製作…北九州芸術劇場